

龍溪才四
長樂縣立木曾山林學校

明治三十拾八年九月一日發行

木曾山林學校友會報

第 五 號

| | |
|-------------|-------|
| 昭和41年11月10日 | |
| 木曾山林學校友會 | 資 料 |
| | 蘇 門 會 |
| 第 15 号 | |

● 目 次

- 一 森林の天蠶業に於ける關係
通常會員 三澤 義治
- 一 木曾の伐木運材に就きて
全 坪倉 藤三郎
- 一 造林の必要
全 寺島 恒治
- 一 農は國の基
全 古根 是
- 一 水の變態
全 遠藤 宗作
- 一 芝草の採取に就て
全 志津 辨次郎
- 一 修學旅行日記
- 一 千葉縣下農科大學演習林一船

● 雜 報

- 一 証書授與式
- 一 卒業生の送別會
- 一 新卒業生諸君
- 一 職員任命
- 一 入學式
- 一 開校三週紀念運動會
- 通 信
- 本會彙報
- 一 會員動靜
- 會 計 報 告

○ 會 告 ○

雜誌發行の義種々なる都合の爲め非常に延引致し候得共次號則ち第六號は六月末日を以て發刊致すべく候につき御寄稿の方は至急原稿御差出し相成度候

明治三十八年五月二十日

編 輯 員

昭和三十一年正月二十日

編輯員

式に至急風靡噴き出し、昧忽更刻
日を以て發匠燈をへく刻のき噴霧蘇の
或匠燈了刻番共穴無開と策六張お六日未
蘇蒸發計の養蘇々まを搭合の爲に非常の

○會 告 ○

木曾山林學校校友會報 第五號

論 說

◎森林ノ天蠶業ニ於ケル關係

通常會員 三澤義 治 (前號續)

扱テ前ニ述べタ通り其林地ノ面積ト林木ノ老幼ト
小閉鎖等ノ狀態ニヨリテ之レニ飼養スル天蠶ノ種
量ノ多少ハ斟酌セキバナラスコトハ勿論此外ニ萌
芽力樹木健康ノ度合土地ノ理學的性質氣候等ノ諸
点ニ注意セキバナラス而シテ是等ノ關係ハ皆年々
ノ經驗ニ基キテ益々改善セラレ良果ヲ奏スルニ至
ルモノニシテ此事タル天蠶飼育中最モ緊要ニシテ
恰モ造林上ノ設計ト等シク大切ナルコトデアリマ
ス何トナレバ此点ニ注意セザレハ是レガ收購上及
其品質ニ大ナル影響ヲ來シ從ツテ其利益ヲ少ナカ
ラシム原因トナルモノデアル故ニ先ズ此点ニ留意
シタ以上ハ自然力ニ多少ノ人工ヲ加ヘテ天然力ノ

過不及ヲ補ヒテ蠶兒ノ安全ヲ計リ上簇セシムルノ
デアリマス斯クシテ得タル繭ヲ林ヨリ收集シテ籠
ノ如キモノ、中ニ入レテ列ベ之ヲ蒸煖爐ニ掛ケテ
繭中ノ蛆ヲ殺ス是ハ普通製糸用トシテノ方法デア
ル此蒸煖爐ニ掛ケルニ付テノ注意ハ強熱ナレバ拾
五六時間普通一晝夜許リデアル而シテ此目的タル
管ニ繭中ノ蛆ヲ殺スニアルガ故ニ時々注意シテ是
ヲ伺ヒツ、夫レヲ施行スルノデアアル若シ一定限度
ヲ越ユル時ニハ生絲ノ光澤ヲ惡シクスルノミナラ
ズ糸ノ立テヲ惡シクスルノデアアル而シテ此限度内
ナル時ハ其目的ヲ達スルコト能ハズシテ完全ナル
繭ガ出殻トナリテ其價值ヲ失フ穢ニナル右蒸煖爐
ヲ終ラバ今度ハ製絲デスガ製糸ノ方法ハ普通ノ生
糸ト等シクアリマス其繭ハ外皮ハ養蠶ノ糸屑ト等
シク抽績トシテ用途ハ種々アリマス製造シタル糸
ハ青山蠶ノ繭ヨリ製シタルモノハ銀色又鼠色デア
リマス赤山蠶則チ柞蠶糸ハ赤褐色デアリマス蠶種
ヲ得ル母蛾ノ出殻ヨリモ他ノ方法ニヨリテ完全ナ
ル繭ト等シキ糸ヲ得ルコトガ出來マスガ此方法ハ
今ヨリ廿二三年前ニ發見セラレタルモノニテ原料

トシテハ鷄卵ヲ攪拌シテ其繭ノ出口ヘ塗抹シテ其糸口ノ乱レサル様ニナスノ方法デアアル此法ガ發見セラレタ後ハ大ニ母蛾繭利用セラレテ當業者ノ收利ヲ高メタ譯テアリマス先ズ前カラ林地林木ト蠶トノ關係收繭製糸法等ヲ述ベタガ是等ノ大凡ソノ割合ハ一定シテ居ルノテアル

左ニ一町歩ニ對スル天蠶種量同收繭量同生繭ノ價格及ビ生糸價ニ就キテノ表ヲ掲グ

| 種類 | 林等級 | 壹町歩ニ對スル蠶種數量 | 同上價格 |
|-------|-----|-----------------|--------|
| 蠶 青山蠶 | 上等 | 一〇〇〇 | 二二、〇〇〇 |
| | 普通 | 〇、八五 | 一〇、二〇〇 |
| 量 赤山蠶 | 上等 | 一、二〇 | 七、八〇 |
| | 普通 | 〇、六五 | 六、〇〇 |
| 種類 | 林等級 | 壹町歩ニ對スル生繭收入粗サル年 | 收入稍豊ナラ |
| | 林等級 | 壹町歩ニ對スル生繭收入粗サル年 | 收入稍豊ナラ |
| 生 青山蠶 | 上等 | 二、五〇〇〇 | 二、〇〇〇〇 |
| | 普通 | 二、〇〇〇〇 | 一、四〇〇〇 |
| 繭 赤山蠶 | 上等 | 二、〇〇〇〇 | 一、四〇〇〇 |
| | 普通 | 一、〇〇〇〇 | 〇、八〇〇〇 |

額

| 種類 | 林等級 | 一町歩ニ對スル生繭價合計 | 同豊饒ナラザル年 |
|-------|------|--------------|----------|
| 蠶 赤山蠶 | 上等 | 四、〇〇〇 | 三、〇〇〇 |
| | 普通 | 三、五〇〇 | 二、三〇〇 |
| 蠶 青山蠶 | 上等 | 二、八〇〇 | 一、五〇〇 |
| | 普通 | 二、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |
| 蠶 赤山蠶 | 上等 | 八〇、〇 | 五六、〇 |
| | 普通 | 七〇、〇 | 四六、〇 |
| 種類 | 品質等級 | 三百拾五匁ニ付 | 三〇、〇 |
| | 品質等級 | 三百拾五匁ニ付 | 三〇、〇 |
| 生 青山蠶 | 上等 | 一八、〇〇 | 一七、五〇 |
| | 普通 | 一七、〇〇 | 一七、〇〇 |
| 繭 赤山蠶 | 上等 | 八、五〇 | 七、五〇 |
| | 普通 | 七、五〇 | 七、五〇 |

備考 本表ハ現今實際行ハレツ、ハアルモノヲ擧ケタルモノナリ蠶種ノ價格生糸ノ價格相場ハ

時々變動アルモノニシテ就中蠶種ノ價格ハ地方ニ於テアリミ行ハレ收繭ノ豊凶及一時ノ需用供給ノ多少ニヨリテ頗ル變動アルヲ以テ一定セズ

生絲ノ用途ハ普通織物用上等織物用トシテ美麗デアツテ其上次夫デアルト評セラレテ需用ハ中々尠クナイ賣買取引地ハ横濱長州藝州廣嶋等デアツテ最モ好評ヲ得テ居マス

元來支那デハ此事業ノ一時盛ニ行ハレタ地方ガアツテ今デモ此業ヲ營ム所ガアツテ生絲ヲ製出スルト聞ケテ居マス故我國ノ森林業ニ於テ地方ノ狀況ト林業ノ目的造林ノ方面等將來ノ關係ヲ熟考シテ此業ヲ隆盛ナラシメ益々林地ノ利用ヲ考ヘテ其收益ヲ高メナケレバナラヌ

熟々現今本邦ノ面積地勢上ヨリ見ル時ハ山岳多ク無數ノ河流四方ニ通シテ忽ニシテ海デアアルカラ運搬ニ便利ナルモ其土地ハ無收額ノ原野ガ比較的大ナルヲ以テ之等原野ヲ利用スルニ就キ先ツ最初ヨリ最モ價値アル森林ハ望ムヲ得テ實施スルヲ得難ヒ譯デアアル而シテ之レ等原野ヲ觀察スルニハ多ク

ハ人煙ニ近キ林地ニ於テ見ル所ナルヲ以テ之レ等多クノ原野ノアル地方ハ薪炭ノ不足ヲ生ジ困難ヲ來スハ現在及ビ將來ニ於テ備テアルト信ジラレルカラ之等林地トナスベキ原野ハ地方ノ衰ヘタル所ガ多ク前述セル如ク直接價値アル森林ヲ仕立ツルコト能ハザルガ故ニ之等原野ニ向ツテハ適應力最大ニシテ且其生長速ナル樺櫨ノ薪炭林ヲ仕立ツルコトガ最モ得策デアアル故ニ先ツ之ヲ仕立テ地方ノ保護ヲ量リ之ヲ利用シテ天蠶飼養ヲ企テルコトハ一舉兩得ノ策デアアル而シ諸君ハ疑フデシヨリ森林ノ害敵ヲ飼育シテ一舉兩得トハ其當ヲ得ナイ話デア

ルト思フデシヨウ最モ一寸ソノ考ヘラレマスガ此薪炭林ニ向ツテ少量ノ天蠶種ヲ放育スルノハ左程害ナイ話デアリマス少量ノ天蠶ヲ放育シ薄飼ヲナス時ハ其飼育セラル、所ノ蚕ハ青葉ノ深キニ圍マレテ雨露霜炎熱寒暑其他已ニ害ヲ與ヘントスルモノヲ凌クコトガ出來テ安全ニ且ツ良葉多量ナル爲メ自然良質ノ繭ヲ收入スルコトガ出來マス又之ガ爲メニハ伐期ガ一二年間運ル、ト雖モ決シテ損失許リテハナク其材質ヲ緞蜜ナラシムルノ利カアル私

ノ地方デハ農業ガ盛ンデ從テ田畑ノ爲メニ多クノ土地ハ耕耘サレテ居リマシテ薪炭ニハ乏シクアルガ山麓ヲ圍繞シテ三四里ニ亘ル櫛櫛林ヲ見マス之レヲ山蠶林ノ目的ニ使用スル爲メ此林ヲ頭木更新或ハ皆伐致シマシテ得ル所ノ薪炭材ハ莫大ナモノデ之ガ一ケ年間ノ燃料ニ充分デアリマス下草ヲ採收シテ肥料ニ充テ、居ル故私ナドノ地方デハ余程此櫛ノ山蠶林ヲ大切ニ致シテ居マス此林ハ春ノ期節ニハヨク林中ニ入ルヲ以テ屢々野火ヲ放ツコアルモ之ヲ他人ノ林ニ延燒セシムル如キハ如何シテモナイ直チニ集マリテ鎮火スルノデアアル此ノ如ク注意周到ダカラ其利益ハ甚大イモノデアアルソレ故ニ原野利用ノ第一着手トシテ先ヅ此種ノ薪炭林ヲ造ルト三年乃至四年目頃ヨリ伐期ニ至ルマテ毎年其利益ヲ見ルノデアアル例ヘ其樹木ガ一文ノ價值ガナクトモ充分相當ノ利益ヲ収ムルコガ出來ルト云フコハ實驗上確カナコトアル右ニ付キ今ヨリ本邦ノ原野ニ向ツテ此方法ヲ漸次施行シテ將來隆盛ノ域ニ至ラシメンコトヲ希望スルノデアアル私ノ村ナドデハ此業ガ大ニ隆盛ニナリマシテ他農業ノ餘暇

ヲ利用シテ之ニ當リ大ニ富ヲ重キタ人モアル又各地方ニ至リ之ガ飼養ニ思フ込メテ大ニ研究致シテ居ル人モアル又群馬縣及ビ茨城縣等ハ行テ櫛ノ薪炭林ニ向ツテ此業ヲ施行シテ所ガ隨分成績カ良好テアツタツテアリマス末ダ御話シシヨウト思フテ居ルコハ澤山アルガ余リ長クナツテ面白クナイカラ此處ラデ止メテ置キマスカ此業ハ將來林業ノ目的カラ云フテモ農業ノ方面カラ見テモ中々有望利益デアアルト云フコハ堅ク信ジテ居リマス(完了)

◎木曾の伐木運材に就て

通常會員 坪倉藤三郎

私は前號に於て木曾森林沿革に就て概略を述べ置き去り今回は其森林内お於ける事業即ち木曾伐木運材に就き聊の一言述べたいと思ふ之れは諸君の中には既に實地を見て能く御承知の方もおありが宛に角其大要を掲げて本會報の餘白を汚す譯である

所で今日専ら行て居る木曾流の伐木運材方法と云ふものは何れの時代から始つたものかは知ら

ないが木曾谷は鎌倉將軍の時代より天正年中尾州犬山の城主石川兵藏殿が木曾谷全体の森林を管理せられて居つた時までは長さ六尺五寸以下は丸太二ツ割或は四ツ割に去た物を製出する以外は伐木法なる者はあつたのに豊臣太閤が大佛を造る爲めに木曾あら木材を取ると云ふ事があつた事からして考へても三百年以前に於て已ふ今日の伐木法が制定せられ尙引續き今日まで此方法が行はれて居ると云ふ事である今日木曾森林が日本三大大美林として天下に名あるも乃素より森林其物が美良であるには相違ないけれ共殊に此伐木運材の方法がなかつたならば如何に廣大なる大面積に如何に美大の扁柏花柏の樹木が繁茂して居ても之れを伐採造林して居りて木曾川を利用して之れを運材する方法を知らなかつたならば今日まで此美大の森林も徒らに死藏せられ又其林木も空しを腐朽して少しも世間に利益する事はない従つて今日名高く賞められて居る様な價値はないであらふ此森林が現在あるといふのも偶然ではないと考へます之れから伐木と運材とを別れて次に述べる事とします

一、伐木法

伐木するには柚代人と柚夫とあつて柚代人が二人の柚夫を指揮して先づ斧を以て樹木を地上一尺を隔て根の部分をも三本足になる様に穴を穿ちて其仆さんとする反對の方向の穴に楔を打ち込みつ、楔に接して居る一本の足を斧を以て伐り倒すものであつて其方法は頗る巧妙である此法ハ一種の伐木法として安全であつて幹材の割裂せる様な事がない代りお材量を損失するのである柚夫は伐り倒すや否や適當の長さに切りて直に皮を剥ぎ丸材と云ふ○尺四及び〃一等の如き印を截り入れる之を呼ぶにトリアシノカンバン、サ、マル、メシモリと云ふと技手補は手帳に記入する其の个は柚夫の看板で柚夫の氏名を知る爲めとサは花柏○は丸太尺四は直徑尺四寸で俗に飯盛シヤクシの音からきてメシモリと呼ぶ此の如き符號を用て聲音上の誤謬を避ける爲めであるが尙之れに類似した語を掲ぐれば三寸四寸五寸六寸七寸八寸九寸一〇寸一尺一尺二尺三尺四尺五尺六尺七尺八尺等の如きである尙材ハ〃一は(阿寺)〃一は

(小澤)ノ上は(小川)伐木所の記號で、上は伐木年度の記號を付けて置、名古屋貯木場へ流出しても之れは何地の伐木であるといふことなど一見して別る譯である又丸太材の横断面は丸くして太材には穴を穿ちて銼を打ち込み置く之れは運材する時に破損を防ぐ爲めである等、又其の詳は、
二、運材法、運材は、山頂より山麓まで、此木會運材の方法は頗る有名のものであつて一般林業家としては其實地に臨んで之れの方法を能く知らねばならぬ事である其方法は先づ山の頂から山の麓に積木場迄谷間を傳つて傾斜の度に應じて二三十間毎に一時木材を留める場所即ち留といふものを造る此留は又ヤヤとも云ふので此處で本數又は材積を計る時に、或はバカリと云ふ工事を施して之れに續いでサデと云ふ一種の機道を作る此サデは巾三尺乃至六尺にして中央は板を布き並べ兩側は丸太材を以て作り圍ひ其中央の板乃土を木材を滑らし出すのです又中央に板を用ひず扁柏の枝條などで横木に交叉して平に編み付けたものなるサデは、タンバサデ、ラサデ、モッコサデ、ン

ロバサデ等各種類のつて構造は多少異なるも運材に於ては何れも大差はない、運材をなす時は日雇總頭の人夫十數人を指揮して丸太材をサデを通して送り落すのである其人夫と雪袴の出で立ちオトオトと掛聲で竹柄の鹿口を木材に打ち立てつ、留の所へ送り引き落すのである其間の絶へず木材及びサデ道に水を散布する此くする時は木材が能く送り行を爲めである又サデ装置の外に、ウス、セギ等の構造もありましてウスは立柱を定め腕を結び二方を雜木などの圍ひ其中に土砂樹木の枝口を損壞しない様にしてある又セギは本谷小谷の水を堰き止めて水を湛へ木材を浮べ下方へ流し送るのである此他山腹絶險で到底前述の如き句配を以て搬出の出来ない処には木釣轉材法を行ふのです此法は木を釣り下ろすもので木材の一端に穴を穿ち之れに十間乃至二十間の麻繩を結び付け其繩の他端を近傍の立木などに捲き付けて其一端を持ち木材を下すに従つて順次繩を弛ますのである夫れと同時に他乃運材夫の材に鹿口を打ち立て漸次下方

に引き落すのである、以上は、
以上の方法は圖説するに實地に臨まなければ到底詳の御話をせることは吾々の及ばない事である而して現在の伐木運材の方法は勞力を要する事が實に夥しいので此仕事に従事するものは運材夫の凡そ三千人伐木に従事する柚夫の數が凡五千五百人此外日雇人夫が二千人位ある又毎年三四月頃伐木に着手して九月頃から木會川を利用して筏流し、去翌年の二三月頃までに漸々名古屋市場に到着するから殆んど一ヶ年と云ふ長い月日かゝつて市場に着するといふ様な有様である、
此木會伐木運材法の前申す通り二百年も以前から行われて日本で有名なものであつて如何に重用視せられた法でも將來此方法を其儘に襲用して行ゐる、や否やと云ふ問題に就て聞久所に依れば將來は無論何事現在に於ても既に色々の差支がある、と云ふ事です夫れは何故かと申せば現今の運材法之非常なる勞力と非常なる日數を要するれてゐる一般社會の進歩に伴ふて需用供給の關係から凡て勞働者賃金が昇騰して將來此勞力の供給に不足

を告げようとする憂がある去る明治二十五六年度の賃金と今日の賃金とは三倍以上あつて居る然るに木材乃價格は騰貴の比は此の賃金騰貴の比に比例して騰貴しないから之れを改良して費用を節約し搬出の日子を短縮するの機械の應用を盛大にして出來得る限り勞働夫の人員を節減する方法を講究なければならぬ事と考へらる、而して現行法は御料局事業として行つてあるが既往に在ては唯一の良法としても將來他林業に對しては何ふか時勢に伴ふて相當の改良を加へたならば其利とする所は大なる事と思ひます、
◎造林の必要
通常會員 寺島恒 治
森林は社會に必要にして日常吾人の食物を養ふ所の薪炭又住其他鐵道枕木列車の箱電信柱船艦等の原料と皆木材に仰がなければならぬ而して近年社會の進歩に伴ふて近年お至りて木材より種々の有益なる工藝品とくさんある、さるをさるてつた、
七

去のみならず佛蘭西での木材の繊維で製紙の原料計りではなく絹糸に代用する織物の原料を得る様になりまた我が國でも富士製糸會社が創立されましたが原料が乏しくて僅ら内に甲斐駿河の樺樽は其跡を絶つ様になりまた又北海道に於て樺樽製造會社が創立せられてる幾何もな久も其材料缺乏を告げ遂に廢業する様なり中國地方に於ても樺樽製造が起つてから白楊の類は伐採し盡されて現今の朴樺扁柏赤松山毛榉みつ木等を代用して居ます樺樽軸木の不足許りではなくて列車の箱の様なもの日本樹種の樺が最も適當であるけれども其樺は日本では不足であつて之れが需用に應ずること出来なくて遠く印度暹羅漳州からちく村を米國からたれおんをいん等を輸入する様になりました如斯く日本に良材がなくて外國より輸入を仰ぐの實に慨嘆の至りでありまた之れに反して日本より外國に輸出するものも五倍子木材樟腦木炭木臘等木材は支那朝鮮に向つて鉄道の枕木とて栗材を輸出しまた以上之輸出の如何に拘らず皆森林直接の利益であつて其原料たる林木は製

造業の興隆に伴ひて忽ち盡さる様になるから務めて造林を行ふの必要があるのです而して間接にあつて之氣候を調和し水源涵養土砂防止等森林がなければ砂漠や河水が涸れたり又近江の國の如く土砂が停滯して河底を高めて遂に川の下を墜道を造らねばならぬ様になります又森林が存在する爲めに漁業が盛になる例は少なくない陸前國の氣仙郡高田灣は古來鱒の産地で有名な地でありました舊藩時代では梅雨の候になりまると漁獲した所は歸は連日千石船に輸出したと云ふが其灣頭に聳れて居る水上山の巒蒼蒼たる森林を燒き拂ひたる爲めに從來の漁利次第に減衰して盛漁の年も往時の三分の一に足りないと云ひます如斯く魚は暗所を好む性質があるから之を薩摩肥後土佐淡路等の海中では人工陰影を設けて漁業をなすと云ひます又吾人の日常目撃する木曾山中に於て鳥を取るに巧みなる之森林があるかかちて鳥が集つて而して取るもの之森林の荒廢した國では此様なことが出来ないと云ひます此外濕潤地を乾燥地となり乾燥地を生産地とすることや防風的作用あり之れ等は間接に

及ぼす森林の利益であります如斯く森林は直接間接に人民に利益を興へるものであるからして木材及木材より生ずる生産物を外國の輸入を仰ぐとして國內で需用に應ずる様にするには何れも其原料たる樹木を養成に務めなければならないのです

◎ 農は國の基

通常會員 古根 是

私も第二回校友會の發行に際して余り有益な事では有りませんが農は皇國の基といふ題目で一言述べようと思ひます抑も農業は國の基です國家富強の策り農業を措く他に求める事は出来ません何となれば皇國は特に氣候溫和土地肥沃に於て善く植物が成長に適するが故に農業は即ち我國の特有の産業で有りまして國家の隆替は農業の發達如何に依るもので農とは田畑を耕して穀物蔬菜を作り牛馬鶏鶩を養ひて肉卵を取り又は桑を植へて蠶を養ひ又は山に木を植へる事業など一般に農業と申します

自分等の日常欠くべからざる食物衣服を始め薪炭

建築材等皆之の農業にて作り出す所の賜で有ります凡て工業でも商業でも品物が多かつたら業を営む事が出来ません其大切の仕事即ち衣食住の基を作る處の業を農業と云ひ其仕事を人々を農夫といひます然るを現今は農業に従事するは恰も耻す可き事業なりと誤認し其結果農業を厭ひ動もすれば空理にて走せ空想に陥り自營自活の途を知らざるに至るものあり國家の爲め實に悲むべき事であります實に農夫の責任は大なるものでありませぬか實に農は國の基です此農は國の基である事を詳細に御咄し致さますと第一農民は尤も國の經濟を助けます我國現時歳入の多分は地租で其歳入金高の四分の三は農民の地租として出す所です第二に之國民の多數は農民の地租として國民の食料は古へから米や麥で之其米や麥を造る所のものは農夫です何と農夫の責任や頗る非常に大なるものでは有らば好んが又第三に之農業は軍事にも大なる關係が有りはす明治二十七八年は一般獸勝の餘光を止免旭旗の東天に輝きいと愛出度大御世に安樂に

生活して居られますのは全々叡聖文武なる
天皇陛下御威徳で有り又軍人の忠勇義氣に
富める結果です嗚呼金鶏動章を賜はりたる多々の
將士を擧げて砲烟彈雨の間に東奔西走して大なる
働きをしましたるが此軍隊に必要な馬は其初め誰
れ手で育てられたかたの外牛豚鶏鶩等の肉に
至る迄何れも海陸軍に必要な食品其家畜を育てま
せて國家の爲めお供えするものと決して商ても
工でも有りません是れ農夫の爲す所でありますか
よりに農業を改良進歩され以て此事業を獎勵益
々以て國家富強の基を堅固ならしめん事を希望し
はす

をに乃ため

盡す心に二ツなし

刀どる身も

鎌をとる身も

◎水の變態

通常會員 遠藤宗 作

僕は頃水木曾川亭に訪ふた所が談はたまたま水

すど亦私同様に天に上ります皆さんか空中で
遊んで居ます時どうかすると空が寒くなると其
時には仲間のものは寒い／＼といふて一所に集り
早變して雲になりはす若しうへ風車でも來ると
私はそれに乗つて山や野や海などを越えて幾千里
の處までも旅行して行きます借て彼れ是れして居
る内に寒さが強くなると私は元の水となつて地上
に落ちます又時により寒さが余まで烈しくなると
私は眞白の霧となつて舞ひ下りますうして地上
に來て熱い時には直ちに水となり又水蒸氣となり
ます少寒い時に之其まゝ止つて暫く勞を休めます
が其時などは小供等が來つて我々を踏み散らして
雪合戦などをあしめますして私の仲間之志士仁人身
を殺して善をなますと云ふ行をなしますそれは私
河や池などに在る時強い寒さお逢ふと仲間の一部
は凍死してがらすや水晶の様になつても他の仲間
れ上をば掩ひ恰も衣服の様な作用をなして他の仲
間を助けるのである又水蒸氣とありて天に上りか
けた時冷却して居る木の葉や草の葉にさわりま
すと私は水銀の様に奇麗な水玉を作りまします而して人

の變態といふ事に及んだ水の口を開いて「凡そ世
界は廣い私の様に速かに形態を變化ししかも足
なして大旅行をするものは又どありはすまい先私
は泉となつて此世の中に生れ出るので此泉を永く
潤さずに保護して久れる物は森林である故に森林
は私に取りては大切な乳母でありはす然るに人
々の濫りに森林を伐採しはすと私は大いに怒り或
は旱魃だとか洪水だとか云ふ大害をなして人々
を苦しめはすて泉となつて出た後我々の仲間が次
第に集つて小川となり大河となり谷のいや平野な
どを流れて海に入りはす其時の人々は私等の頭上
に重い物を載せて運びます而して私等によつて荷
物を運ぶと割合に運賃が廉くなりまはすのら従つて
交通の便が開き世は次第に進化します又私は時に
もると皆さんに連れられて桶に入れられたり又往
來や庭などに蒔かれたりします然して其處らに遊
んで居ると太陽が出て私を暖めて下さると私の
何となく心が浮き立つて躍り出し速に變態し無
色透明の水蒸氣となつて天へ上つて參ります又海
に行つて居ます仲間のものも太陽の温熱を受けは

々之之れを露と呼びます又うれが一層強ひ寒さに
逢ふと屋根の上や橋の上などに霜となりて、白び死
骸を残しままかうして居る内に太陽が出て暖めて
くれると皆生き歸りて水となり或はうかれ出して
天に上るものもあります又私が地中の上層に在る
時寒さに出逢ふと水晶の様なものを作て其上に岩
石の薄片や砂土などを載してをります人々は之れ
を霜柱と云ひますして此霜柱は冬作や若き苗木な
どを害する事があります又私が泉から出ると地に
地中に於て暖められ且つ種々なる礦物を誘ふて出
て來ますと人々はうれを温泉など云ふて大それ
もてはやま其へ入り湯あみをなすものが多くあり
まは其内病人が最も多い様です斯く我々は種々な
形態の變化と大旅行とを以て此世界の中を遊び
廻つてをります」此事を尙細かに聞かうと思ふた
が日も全く暮れたから止むを得ず謝して歸路に着
いた

◎柴草ノ採取ニ就テ

志津辨次郎

柴草ノ採取ガ山林ニ對シテ有害ナルコトハ今更私
ガ申サストモ諸君ハ千モ万モ御承知デアリマセウ
ガ實際ニ於テ其被害ハ豫想以外ノ大害ヲ及ボスモ
ノデアリマセウ抑モ山林ハ其他ニ生ズル樹木ノ落葉
及ビ雜草ノ朽土トナシテ土地ノ生産力増加スルヲ
以テ之ヲ採取スルハ恰モ作物ヲ作りテ肥料ヲ與ヘ
ナイ様ナモノデスカラ年々行フ結果ハ山地ノ生産
力ヲ減ゼシメ且日光ハ地面ヲ直射シマスカラ乾温
其度ヲ失シマスカラ良樹種ハ段々ニ減少シ劣等ノ
モノノミ殘存シ途ニハ彼ノ恐ルベキ禿山トナルモ
ノデアリマセウ往々吾々ガ諸所ニテ見マセウニ非常
ナル禿山若シタハ禿山ノ壘々トシテ一ノ樹木ノナ
キ所ニ於テ獨リ神社佛閣ノアル所ニテ樹木ノ蒼生
シテ居ル地ハ頗ル肥土植樹ヲシテアルモノハ勢イ
能ク成長シテオリマセウ之等ハ畢竟其初メニ於テハ
至ル處同ジ山地ニテ有タデ在リマセウガ一方ハ伐
採后植樹等ニハ少シモ氣ヲツケズ年々柴草等ノ採
取ヲ自由ニ放任シ一方ハ是等ノコトナク落葉段々
榮ナリテ肥料トナリ斯クハ如ク肥瘠ノ懸隔ヲ生ジ
タル以テデアリマセウ

元來我國ノ人民ハ一般ニ通ジテ愛材思想ト云フモ
ノガ乏シク至ル處ニ山地ノ横ハリ居ル結果殆ンド
林産物ハ無盡蔵ノ如ク視セラレ植木ヲスルト云フ
様ナリハ少シモ腦髓ニナク多少植樹シナシタルモ
ノモアル制裁ヲ受ケテ初メテ之レヲナスノミニテ
大低ハ皆目前ニ小利ヲ見テ年々柴草ヲ採取シマセ
カラ山ハ次第ニ瘠セ柴草ノ發生樹木ノ成長ヲ減セ
シメ故ニ農民ハ山ノ此處彼處ヲ驅ケ廻リテ以テ之
レヲ採取シ途ニハ全ク植木ノ成長ヲ絶テ恐ルベキ
禿山トナリ一朝大雨ニ際シ土砂ハ崩壊流出シテ田
畑ヲ荒廢シ少シク旱天續ク時ハ旱魃シテ灌溉水ニ
困ミ甚ダシキハ飲料水ノ欠乏ヲ來シ國家ニ害ヲ及
ホスト實ニ甚ダシキモノデアリマセウ諸君ハ本年七
月ノ脩學旅行ノ片御覽ニナリタ彼ノ本縣東筑摩郡
手伏川ノ如キハ其一例デアリマセウ
以上述べマシタ如ク柴草ノ採集ハ直接間接ニ害ヲ
受クルコト甚ダシキモノデ有リマセウ是ヲ禁止
スルハ如何ナル方法ニ依ツテ然ルベキヤハ御互ニ
研究スベキ問題デ有リマセウガ第一ニ國民ニ林業
ノ思想ヲ注入シ植樹ニ保護ニ獎勵スルハ云フマデ

モナキ事デ有リマセウ唯其柴草ノ採取ヲ絕對ニ禁
スルト云フコトハ我國ノ農業ノ現況ヨリシテ少シク
許サナイ處ガアリマセウガ元來我國ノ柴草ノ採取
地ト云フモノハ比較的廣大ニ失シ亦其山地ト云フ
モノハ極メテ不規則ニシテ点々此處彼處ニ立木ヲ
見柴草ノ採取ヲ目的トスルカ將薪炭材ノ供給ヲ目
的トスルカ區別シ難キ不經濟極マル山地カ誠ニ多
イノデ在リマセウ是等ノ山村ハ充分ニ施業ヲナシテ
區別ヲ判然ナラシメ一方ニハ農業ヲ改良發達セシ
ムルト共ニ柴草肥料ニ換フルニ人造肥料ヲ以テシ
其採取區域ヲ段々ニ減少シ全ク禁ズルカ然ラザレ
バ彼ノ森林保護上必要ナル防火線ヲ以テ柴草採取
ニ供スルニ至ラバ林業上裨益スル處少ナカラザル
ベシト信ジマセウ聊カツマラヌコトヲ述ヘテ本誌ヲ穢
シマセウ

◎第二學年生徒修學旅行日記

◎六月十六日雨天
午前五時三十分ニ校庭へ集合シタ校長カラ再度
注意ヲサレタソレカラ旅行中ノ組別ヲ報告シタ

次ノ如クデアル

關町迄諸先生及ヒ一二年生徒ニ見送ラレ萬歳ノ
聲ト共ニ我々ハ見送リノ一行ニ別レテ雨ヲツイ
テ進行ヲ始メタ宮ノ越ヘ着タカ七時半數原ヘハ
九時ニ着シタ中飯ニハ早イケレモ鳥居峠ト云フ
難所ガ有ルノデ米屋ヘ休ンデ中飯ヲ濟シテボツ
ボツ出掛タ峠ノ中腹以上ハ皆々一歩一歩アエキ
アエキデ上リ直グ一休モセナイデ下リタ奈良井
平澤費川ヲ送リテ一時四十分ニ櫻澤ヘ着イタ一
休ノ後宿泊地ニ付テ糞坑迄行カ又豫定通り洗馬
デ泊ルカ決議シタ二三ノ疲勞者ノ他ハ皆糞坑ヲ
希望シタ故ニ其様ニ決定シテ又歩ヲ拾フタ洗馬
デ一寸休ミテ六時ニ糞坑ニ着シテ川上旅館ニ投
ジタ此日ノ行程十二里余今日ノ行路ニハ觀察ス
ベキ事トテハ少シモ無カリシ雨中ノ歩行故一行
總テ非常ニ疲勞ヲ覺ヘタヨリデアツタ

◎六月十七日半農半晴鹽尻發馬

午前六時十五分川上旅館出發ス町外レニ至レバ
大熊中島ノ兩君來リテ一行ニ加ハル之レヨリ糞
坑ニ登ル高サ一千二百呎ナリト道ノ一側ニ行

道樹アリ長サ一里ニ亘ル此行道樹ナルモノハ孝
謙帝ノ時其制ヲ定メラレシガ當時ニ於テ植栽セ
ラレタルモノアルヤ將タ舊藩時代ニ於テ潘命ニ
ヨリテ植栽セラレタルモノナルヤ未タ其眞否ニ
付キテハ知ルヲ得ザレモ兎ニ角ニ行道樹ナル事
ヲハ推察スルヲ得タリ其他ニ落葉松等ノ植栽シ
アルモ濃霧ノ爲メ其眞相ヲ觀察スルヲ得ズ昨ヲ
下リテ之レヨリ諏訪郡ニ入ル抑モ此諏訪郡ハ吾
國製糸業ノ最盛ナル地ニシテ生糸ノ産額ハ日
本全國ノ六分ノ一ヲ占メ宏大ナル製糸工場ハ到
ル處ニアリテ天ヲ摩スルノ烟突ハ殆ンド林ノ如
シ九時二十分官管中社諏訪神社ニ參詣ス暫時休
憩ノ後出發シテ富部ニ至リ一行ハ二隊ニ分レ一
隊ハ湖上ヲ直航シテ上諏訪町ニ他ノ一隊ハ陸路
ヲ取り拾時四十分上諏訪町牡丹屋ニ着ス湖上ノ
一隊後レテ來ル先ツ中食ヲ喫ス柳澤君來リテ又
一行ニ合ス時ニ山林學校ヨリ電報來リテ豫定ノ
金澤泊リハ馬木泊リト變更ス牡丹屋ヲ出發シテ
上諏訪町外レニ至リ一行ハ馬車ニ乘リ金澤ヲ過
ギテ釜無川ヲ渡ル兩岸ノ土砂崩壞シテ流出スル

コト驚クニ堪ヘタリ是等荒廢ノ原因ニ就キテハ
大ニ吾々ノ研究スベキ問題トシテ價値アリト信
ズ五時四拾分馬木ニ着シ大坂屋ニ投宿ス之レヨ
リ先キ山梨縣廳ヨリハ林業巡回教師山田新助君
近藤昌平君ヲ以テ吾々一行ヲ迎フル爲メ大坂屋
迄出張セラレ特ニ近藤君ニハ尙金澤迄來ラレシ
ハ深ク當縣ノ厚意ニ對シテ謝スル處ナリ當夜旅
館ニ於テ山田巡回教師ハ山梨縣山林ノ荒廢ノ源
因ト之レヲ回復スル方針ニ付一場ノ演說ヲ爲シ
タリ其大要別項ニ記載セリ

●六月拾八日土曜日
今朝ノ起床ハ五時夕ノ豫定ハ四時ノ理デアツタ
ガ一時間後レタ爲メ大急キニ仕度ヲシテ朝飯ハ
庭デ立食山田技手ト近藤君トノ好意ニ依ツテ台
ケ原迄ノ馬車代ヲ呈サレ總人六臺ノ馬車ニ投シ
テ此驛ヲ出發シタ時ニ六時馬車ノ上ニ左右ノ荒
廢セル諸山ヲ見ツ、台ケ原ハ八時五分ニ着シ
夫レヨリ步行華崎迄續ケタ道ニ山田師ノ荒廢地
ニ付談話アリ華崎着ハ午前拾時卅分旅車ノ發ハ
拾時卅五分ナルヲ以テ夫レ迄停車場ニ於テ休憩

中瀛車ハ來レリ學生團體ノ割引規則ニ依リテ直
チニ乘リ込シダ道ニ農林學校ヲ觀察セントセシ
モ瀛車ノ爲メ之レヲ得ヌ甲府停車場へ着セシキ
ハ拾貳時頃本縣ノ厚意ニテ縣屬藤原氏ノ案内ニ
テ直チニ縣廳へ行キタリ玆ニ於テ第六課長林學
士齋藤乙作氏ニ面會シ其レヨリ旅館ハ陽館へ投
宿荷物ヲ置キ縣苗圃へ行キタ此苗圃ハ昨年ノ設
置ニテ最年長ニテ貳年生勿論他縣ヨリ買入レシ
モノニテハ數年生ノモノモアリシガ殊ニ珍ラシ
ク感セシハ外國樹種ノ苗木ニテ(ポブラス)(プ
ラタース)(モニリフユラ)(バルサシフユラ)
大王松ユ一カ樹獨乙赤松及黒松等ノモノデアツ
タ齋藤林學士ハ之等ノ樹種ニ付キ一々詳細ナル
説明ヲ與ヘラレタ其レヨリ見本林ノ觀察ニ行キ
タ見本林ハ未タ完成セザレモ約四十町歩アル由
現今全ク植林ヲナシタルハ僅ノ部分而シテ之レ
カ第一二三ノ三ツニ分レテ居ル第一ハポブラス
ノ單純林第二ハ一部赤松ト扁柏ト混交林一部ハ
クぬぎノ單純林第三區ハ三部ニ分レ一ハ梓トク
ぬぎ一ハポブラストクぬぎトノ混交林一ハ赤松

ノ單純林デアツタ齋藤氏又之等ノ見本林ニ付イ
テ懇篤ナル説明ヲ與ヘラレタ夫ヨリ旅館ニ歸リ
タ此夜九時半迄散步ヲ許サレシ最初ノ豫定ハ馬
木ヨリ直チニ魚秋澤へ至ルワケデアツタガ夫ヲ
變更シテ此甲府へ來タ爲メ非常ニ大ナル利益ヲ
得タ彼ノ苗圃見本林ナドトモ木曾地方テハ見
得ヘカラサルモノテアロウ壁頭第一ノ觀察非常
ニ愉快ナリシ

●六月十九日曇
六時旅館ヲ出立シタ近藤岡戸原君カ見送ノ爲メ
ニ旅館へ來ラレタ三君ノ厚意ニヨリテ甲府鐵澤
間ノ鐵道馬車賃ヲ寄送サレタニ付テ我々ハ二臺
ニ分乘シテ進行シタ左手ニ富岳一秀ヲ見テ七時
四十分ニ鐵澤ニ着シタ乗船ニ異議ヲ申立テタル
モノ多カツタカ警察ノ保証モ有タシ勞々豫定ノ
乘ツテ得々出タ舟中ノ穢ハ又別テアツタ川底ハ
森林荒廢ノ決果トシテ土砂ノ流出多ク甚タ埋テ
居ル十一時三十分ニ身延村へ着シタ此地豫定觀
察地テ有ル大門ニ着シタノガ十二時十分門ハ樺

ノ二尺七寸ニ一尺八寸高三間ノ材柱トシテ有ツタ題シテ「開會關」トアツタ夫レヲ入ツテ左手ニ石堂カ高ツテ「當山發軔之道場」トアツタ蓋シ之レ日連上人カ當山ヲ開クニ當テ思慮ヲ廻ラシタ處テ有ルソノダ其レカラ上リテ橋ヲ渡リ町ニカ、ル其レカラ本山ノ石段トナル此アタリ二百年ヨリ五六十年二十年等ノ大小杉ガゾクゾクト立並ランデ居ル元此山ノ面積ハ一萬七千六百三十三反五畝步デアル右ハ御朱印地デ有ツタノガ明治維新ニ際シ奉還ヲ命セラレタカ現在テハ當山ニ依托サレテ居ルソノダ此山ニ造林ヲ始メタノハ凡ソ四百年前日朝上人ノ世ニ於テ一回行フタ今日存在スル古老木ハ其時ノ物デアルトノコダソレカラ大凡二百年ヲ經テ四十一代日辰上人ノ代ニ於テ第二回ノ植林ヲ行フタ今日謂所千本杉ト云フ處ノ杉樹ハ其中ノ物デ有ル第三回ハ明治廿三年カラ着手シテ今猶繼續シテ居ル今日實習ニ造林シテアル地ハ面積カ三百町步計リ有ツテ本數一百十萬本テ有ル植附本數ハ古今一様テ一町步三千本即チ坪一本ノ割合デアル昨午カラ

六尺ノ正三角形植付ヲ行フ様ニナツタ樹種ハ良地ハ杉中間ガ杉ト楡ノ混交林實地カ楡デ有ルソノダ苗木ノ供給ハ當山ニ於テ苗圃ヲ仕立テ四十年生位ノ母樹カラ種子ヲ採集シテ之レヲ播種シ楡ハ三回床替滿三ヶ年生杉ハ滿三ヶ年生二回床替ノ物ヲ山出トスル移植ノ場合ニハ根ヲ切ツテ之レヲ行ヒ之レヲ仕立ツルソノダ播種料ハ杉ハ坪三合楡ハ五合ソノシテ一升ニ對スル成苗數ハ扁柏七千杉一萬位ダソノダ下草刈拂ヒハ一年一回四年間位刈ツテ苗木ガ草ヲ括ルニ至ツテ止メル其レカラ御堂ハ七堂伽藍ガ有ツテ中々壯麗本堂ニ休ンデ後チ案内ヲシテ貰フタ畫ニハ狩野法院ノモノガ多ク又天皇皇后兩陛下ノ御聖筆ノ御題目ガ都合二幅其他上人ノ白骨堂等ヲ見タソレカラ山林植栽有志取扱所アリ三時ニ下山シテ又舟デ万澤村ニ着シタ時將ニ七時三十分デアツタ此沿岸ハ處々ニ杉楡ノ造林地ヲ見タ



◎六月二十日曇後雨萬澤發伊豆修善寺着午前六時十五分萬澤丸屋ヲ出發シテ山梨縣南巨摩郡万澤民有林字下横澤山ヲ万澤前村長吉田忠一氏ノ案内ニヨリテ視察ス其造林法々々普通一般ニ行ハル、造林法ト甚ダ其趣キヲ異ニス依テ今此地ノ村長ニヨリテ聽キ得タル造林法ハ次ノ如シ

本村ハ二里四方ニ亘ル面積ヲ有シ其内山林ノ面積ハ九百余町步アリ林業ハ混農林業ニシテ山地所有者ハ先ツ其地ニ生ヘ居ル所ノ自然生ノ樹木ヲ材採シテ此地ヲ小作人ニ貸與ス小作人ハ之レヲ借り受ケテ此地ニ火入ヲナシテ燒畑トシ前作業トシテ先ツ初年ニ蕎麥ヲ造リ次年ニ粟ヲ作り三年目ニ里芋四年目ニ三椏ヲ植栽シ五年目ニ至リテ杉ト赤楊トヲ同時ニ植ヘ付ケ赤楊ハ十年乃至十五年ニ至リテ伐採ス既ニ此年ニ至レバ杉ハ次第二閉鎖ヲ保チ來リテ赤楊ヲ伐採スルモ再ヒ萌芽シテ杉ノ生長ヲ害スル事ナク杉ハ愈々生長シテ全クノ單純林トナル此時ニ至レバ小作人ハ此杉林ヲ地主ニ返還ス故ニ此造林法ハ初ハ中林

作業ナルモ後ニハ蕎麥作業ニ變更ス前作業ニヨリテ得タル蕎麥ノ收穫ハ一反步ニ付八斗三椏ハ三回乃至五回ノ收穫アリ皆製紙ノ原料トス之ヲ以テ紙ヲ製スルニハ先ツ其皮ヲ剝ギテ紙ニ製ス其剥皮ヲ乾燥セシモノ三十貫ニ付キ拾圓内外ニシテ一反步ノ收穫ハ土地ノ良否ニヨリテ異リ上地ハ六十貫下等ノ地ニ至リテ三十貫ノ收穫アリ需用先ハ東京地方ナリ之等農物タル蕎麥粟里芋三椏及赤楊等ハ皆小作人ノ收入トナル斯ノ如キ法ニヨリ順次ニ造林ヲ爲シツ、行クヲ以テ地主ハ別ニ造林費ヲ要セズシテ良林ヲ仕立ツルコトヲ得杉ノ生長ハ植付ケテヨリ十五年間目ニ至リ長サ五十尺ニ達シ目通り周圍二尺五寸トナル植栽ノ法ハ成可正方形ニ近カカラシメ杉ハ一坪ニ一本植トシ赤楊ハ二坪一本三椏ハ一坪二十本植トナス

(1) 山地ニ植ヘ付クル苗木ハ地主自ラ苗圃ヲ設ケテ之ヲ仕立テ良苗ヲ撰ンテ小作人ニ交付ス

(2) 枝打

枝打ハ十年目ニ始メ二三年ヲ隔テ之ヲ行ヒ二

十年頃ニ至リテ止ム其時期ハ秋ノ彼岸ヨリ翌年四月頃迄ノ間ニ於テ行フ尤モ適當ナル時季ハ春ノ彼岸前後ニシテ枝打一本ノ賃銀一厘乃至二厘ナリ

(3)

伐期
森林經理學等ノ應用未タ行ハレズ各自ノ目的如何ニヨリ二十年乃至五十年ヲ以テ伐採ス需用先キハ地方又ハ東京方面へ最モ多ク出シ角材九太材電柱トシテ需用アリ

(4)

杉ノ貯蔵
壹反歩ニ三百本ヲ植付クルモ枯損木其他ノ被害等ノ爲メニ伐期ニ至リ二百五十本位ニ減ジ二十年目ニ上等一本ノ代價五拾錢下等ハ二十錢平均三四十錢ヲ得

(5)

苗木ニ要スル種子
苗木ニ要スル種子ハ二十年生位ノ母樹ヨリ採集シ播種量ハ精撰種一坪ニ二合ニ回床替ノ三年生ノ苗木ヲ以テ山出シトシ別ニ防寒等ノ設備ヲナス杉ハ一回伐採シタル後地ハ杉ト楡トヲ混植ス然ルキハ其生育頗ル宜シク其割合

(6)

ハ檜ハ杉ノ三分ノ一又ハ半分位トス近來最初ヨリ杉ト楡ト混植ヲ試験セシニ其ノ育頗ル良好ナリ

山林ノ取締
山林ノ取締ハ小作人ハ地主ヨリ恩惠作業ニ預ルヲ以テ何レモ愛林思想ニ富ミ盜伐火災等ノ患ナシ夫レ故ニ防火線等ノ設ケナシ

此視察ヲ了ヘ九時方澤ヨリ舟ニテ又富士川ヲ下リ岩淵ニ向フ中途ニ於テ静岡縣 郡芝川ノ製紙會社ナル伊勢四日市ノ分工場ヲ視察セント芝川ニ至リテ舟ヲ下リ全製紙會社事務所ニ至リ工場ノ視察ヲ乞ヒシニ早速承諾アリテ一行ハ直チニ應接室ニ至リ事務員ニヨリテ製紙ニ關スル一場ノ説明ヲ聽ク之レヨリ工場ニ到リ一々機械説明ヲ與ヘラレシガ一人トシテ驚カサルモノナシ其説明別項ノ如シ此視察ヲ了リテ前ニ舟ヲ下リシ所ニ至リテ近藤君ニ別レテ告グ別レニ望ミ近藤君ハ一行ニ向イテ諸君ニハ健全ニテ大ニ視察ヲセラレ充分ニ得ル所ニ持テテ歸校セラレンコトヲ望ムト一言ノ袂別辭ヲ與ヘラレシハ一行ノ深

ク腦底ニ殘リシ所ナリ十二時五十五分舟ハ岩淵ニ着シ直チニ停車場ニ至リ某茶屋ニ暫時休憩シ二時三十分ノ列車ニ乗シテ大仁ニ向フ途中三島驛ニテ乗り替ヘ四時半大仁ニ着シテ下車ス此時静岡縣御料局支廳修善寺出張所ヨリ技手補八木茂作氏大仁迄吾々一行ヲ迎フル爲メ出張セラレ全氏ノ案内ニヨリ此処ヨリ半里程先キナル修善寺温泉大川屋ニ至リ投宿セリ



●六月二十一日

午前七時修善寺驛ヲ發シテ別ニ視察スル所モナク湯ヶ島へ着セリ僕等本ヨリ旅館落合樓へ着シハ十時三十分迄ニテ晝食ヲナス御料局静岡支廳天城出張所ノ吏員三名我々ノ指導者トナリテ天城山ヲ視察ノ爲メ十時三十五分頃此樓ヲ立チ出テタリ道ニ御禮林ナル林アリ杉林ニテ舊幕時代

ニ於テ雜木ヲ無代ヲ以テ地方人民ニ附與セシ爲メ人民等ハ其恩ニ感シ雜木伐採後杉樹ヲ植栽シ以テ其報恩トセシ由大ナルモノハ直徑約一尺五寸乃至二尺位ノモノアリ宇大澤端ナル処ニ於テ休憩ス此地ニテ湯ヶ島氏ノ製板事業ヲ見ル夫ヨリ又歩ヲ進メ天城山墜道へ着ヌ當墜道ハ長サ二百四十五間明治卅三年起工三十五年ニ於テ竣工セシモノニテ費ス處ノ經費拾萬圓余又以テ如何ニ大ナリシカ知ルニ足ラン此地ニ於テ當山ノ施業及造林等ノコニ付大体ノ説明ヲ與ヘララタリ歸路ハ山道ヲ取リシガ随分困難ナリシ道ニ炭燒小屋數多ク事業ヲ体ミ居ルモアリ又盛ニ從事シテ居ルモアリ原料ハ小ブナ以前ハ御料局ニテカシヲ拂下ケ此事業ニ從事セシガ現今カシ欠乏ヲ來シブナヲ以テ之ニ當テシトカ輸出地ハ主トシテ東京地方ニテ價ハ一俵四貫目入貳拾錢位イニ販賣シ得ルトノコ某所ニテ再ヒ談話セラルモミツガノ天然林其下木トシテハツバキヒサカキサカキ等温帶付對種六十餘種アルモミハ一町歩六七十本位ノ割合ニテ年令ハ殆ント百年乃至九

十年位イデアアルツガモ大概之ト同シ下刈リハ當地ニ於テ最必要ナル事業ニテ植后一年間下刈リヲセザレバ草ノ繁茂ノ爲メ杉ノ如キハ勿論植ト雖モ亦之レガ爲メニ害セラレ枯死スルニ至ル事カアル此事業ハ明治三十二年頃最多ク行ハル單ニ下刈リノミニテ年々費ス所一万二千円程ナリシカ



●六月二十五日曇

五時十分八重恒館發六時靈岸島着夫レヨリ東京灣汽船株式會社ノ大陽丸ニ便乗午后五時天津着油屋ニ投ズ夜手塚教諭ヨリ清澄山ノ森林概略ニ付筆記ヲサセラル



●六月二十六日晴天

午前七時千葉縣下安房國安房郡天津町油屋ヲ發

シ手塚、林ノ兩指導教員ニ引率セラレ之ヨリ東北一里二十四丁ヲ隔ツル農科大學清澄山演習林ノ大目的地ニ向ヒテ愈々視察ノ途ニ上ル先ツ天津町ヨリ東ニ折レテ行ケバ漸ク昇リ坂トナル長キ坂路ヲ經テ午前八時四十分清澄山字切り通シニ達ス仰ギ見レバ右方ニ當リテ杉樹栽ルモノ鬱然トシテ山ヲ圍ミ其年令ハ九年乃至十年頃見エ其生長ノ宜シキヲ問ハズシテ知ルヲ得字切通シノ地海拔二百四十 アリ抑此清澄山ハ地質學上第三基層ニ屬スルモノニシテマチ層、白岩層、三ツ石層、ピツ層、ノ五ツウヨリ成リ土壤多クバ砂質壤土ナリト清澄山ノ内最も高キハ妙見山ニシテ海拔三百八十メートルアリト九時三十五分愈々帝國農科大學清澄演習林官舎前ニ着ス先ツ兩指導教員官舎ニ至リ吾々一行ノ常山ヲ以テ今回大目的地トシテ視察ニ來リシ來感ヲ述ブ事務所ヨリハ一行ヲ官舎ニ導キ茶菓ノ饗應ヲ以テス暫時休憩ノ後清澄山演習林測量主任農科大學林學部實科卒業松村先生吾々一行ノ處ニ來ラレ清澄山演習林ニ付キ次ノ演說ヲナサレタリ依テ今其

大要ヲ記ス此演習林ノ出來タノハ明治廿七年デアツタ夫レ以前ト云フモノハ東京大林區ノ大瀧小林區署ノ管轄地デアツタ処ガ此山ガ大學ノ演習林トナツテ學生并ニ教員ノ演習地トナリテ只今其面積ガ三百三十六町歩アル又明治三十年ニ至リテ東京大林區久留里小林區管轄デアツタ奥山官林ノ大部分ヲ農科大學ノ附屬トナリテ其面積ガ千八百〇五町步デ清澄奥山ヲ合シテ貳千四百拾余町步デ之レヲ農科大學千葉縣下演習林ト云フ名稱ヲ下シタ此演習林ノ目的ハ主トシテ學術研究ノ爲メ供スルモノト普通ノ至濟的ニヤルモノトノ二ツニ分レテ居ル其内奥山ノ方ハ普通至濟的ニヤル方デ此清澄山ノ方ハ學術研究ノ爲メニ供スルヲ以テ目的トスルガ故ニ資本勞力生産トノ如何ニ重キヲ置カズシテ皆試驗的ニヤルノデアアル夫レ故ニ技幹ヲ折解シテ材積ヲ見ルトカ造林期節、技打時期、林道ノ設定法、伐木ノ方法或ハ外國樹種本邦ノ地ニ適否等ノ如何ヲ須ラク各方面ヨリ研究スル爲メ山林ニ供シテアルノデアアル大体此清澄山ニ付テハ此ノ様ナ事デアリマ

ス此話シ了リテ今氏ノ案内ニヨリテ清澄山字切通シ南澤ト云フ處ニ於テ内外國種ノ見本林ヲ見ル其内樹種ハ朝鮮松金松センダンウリギ、白雲木、コノデカシワ、ウラジロガシ、シロ、カハ、イタビワ、サンゴシユ、サカキ、ヒザカキ、ヤブニツケ、クサマキ等外國樹種ハポフラス、スペチオアヅナ、ハンテン木、落羽松エンビツビヤクシン、モベタナ松スミシヤモミ、亞米利加ヤマナラシ、ロンドンヒノキ、佛國海岸松等ナリ松村先生ハ此等樹種ニ付キ一々懇特ナル説明ヲ與ヘラレタリ此見本林ノ視察終リテ同山字觀音瀧南澤ト云フ所ニ出ズ此所ハ觀音瀧ト千兒ノ瀧トノ双方ヨリ落ち來ル所ニシテ風景頗ル明ビナリ一同此所ニテ休憩ス松村先生ヨリ清澄山ニ於ケル杉ノ伐期ニ付キテ一場ノ話アリ杉ハ伐期ヲ七拾年トシ間伐ハ植栽シテヨリ卅年目ニ至リテ第一回ノ開伐ヲナス檜ハ杉ト見做シテ取扱ヒヲナス雜木ノ伐期ハ拾五年トス杉ハ一尺メ貳圓二十錢乃至廿五錢檜ハ尺メ杉ノ二倍半ノ價カスル雜木ノ種類ハ檜柯大檜小檜等ニシテ一柵ノ價ガ貳圓五拾錢

デアアル又此演習林へ年々植栽スベキ造林面積ハ二十町歩乃至廿五町歩デ一町歩ノ苗木ノ數ハ四乃至四千三百廿本デ初年ニハ二回ノ刈刈ヲスル而シテシテ其丈一丈余ニ及ブ程デアアルシテ皆人ダシクシテ其丈一丈余ニ及ブ程デアアルシテ皆人夫ヲ雇フテ刈リ取ルカ二回ノミニテハ充分ニ効ヲ奏スル事ガ出来ナイカラ皆人夫ヲ雇フテ刈ル其刈賃ハ一反歩四拾錢次年ヨリ一回トシ五六年至レバ刈セズ造林費ハ苗木ノ代、補植、下刈、苗木ノ運搬費打植付費等合シテ一町歩六拾五圓乃至八十圓植付法ハ五尺ノ方形植トスレテ前代樹木ノ伐採根等ノ存在スルト斜傾急峻ナルトニヨリテ正規ノ植栽ヲナス能ハザルヲ以テ適當ノ目分量植トシ成可方形植ニ近カ、ラシムル様ニ栽ヘルノデアアル又茲ヲ立テテ字向峯ト云フ処ニ至リ樟ノ植栽セルモノヲ見ル其面積ハ五町歩アリ此地以前ハ檜ト茅ノ雜生地タリシヲ以テ之レガ伐期ヲ一時ニナシ其跡ニ樟樹ヲ植栽セントセシガ一時全体ヲ刈リ拂フハ甚タ土地ノ利用上不經濟ナルヲ以テ種々考案ノ結果本多博士ノ考案

ニヨリテ此雜木ヲ帶狀ニ伐採シ其中ハ三尺五寸位トシ五尺ヲ隔テ、樟樹ヲ其間ニ植ヘ伐リ殘セ雜木ハ保護トテ殘存セシメ五六年ヲ經テ最早保護樹ヲ要セザルニ至リテ伐採ス其生育ノ有様ハ比較的谷底ニ近キ方ハ一般ニ成績良好ニシテ山ノ上部ニ位スル処ハ割合ニ生育良好ナラズ而シテ之レガ年々植栽スヘキ面積ハ二町四五反歩トシ伐期ヲ二十五年ト定メ芽萌ヲ以テ森林ノ更新ヲ行フト云フ此造林地ヲ過キテ清澄寺ノ前ニ出ズ此寺ハ南無妙法蓮華經ノ開祖タル日連上人未タ小僧タリシキ此寺ニオリテ修業セシ寺トテ清澄界限ニ於ケル有名ナル寺ニシテ當時參詣人日ニ數十人アリ寺前ニ千年ヲ經タル古杉アリ胸高周圍六間三尺高サ二十六間余アリ之レヨリ清澄寺ノ西北字千間山ト云フ処ニ至リテモミ、ツカ、ノ原生林ヲ見ル其年令判然セズト雖モ古木森々然トシテ畫尙ホ暗シスル原生林ノ今尙ホ依然トシテ存スルハ古ハ此地方ハ佛教旺盛ナリシ爲メ猥リニ樹木ノ伐採ヲナサシテ却ツテ植付法ノミ行ハレタルモノ今日迄繼續シテ來リシニヨル

トイフ更ニ此ノ山ニ踏ミ入りテ實況ヲ觀察シ頂上ニ奉祀セル千間神社ノ處ニ至リテ休憩シ一同松村先生ニ禮ヲ述ヘ三々伍々旅舎ニ歸リシハ午後六時ナリキ此夜一行ハ二隊ニ分カレ一隊ハ山口屋ニ一隊ハ小梅屋ニ投宿ス

●六月廿七日晴天

七時廿五分旅館ヲ出發シ先ツ事務所ニ至リ茲ニテ松村先生ノ「トランシット」「ラオドライト」ノ説明ヲ聞キ松林ノ觀察ニ出テ清澄寺ヲ過リテ栗カ澤ナル地ニ達ス此ノ地杉樹ノ單純林ニテ頗フル美ナル林相ヲ保テリ此地ハ清澄ニ於ケル二等地位ニ屬シ傾斜ハ南向キニシテ樹令七八十年ニテ樹高殆ント十七八間目通り周圍ノ大ナルハ四五尺ヨリ小ナルハ二三尺ニ至ル直徑平均一尺七八寸ヨリ二尺位ナリ此ノ林地ノ面積三町五反歩此間ニ生立セル杉樹二千六百本松村先生此地ニテ形數ニ關シテ次ノ講話アリタリ

當清澄演習林ニ於テ普通用ニル形數ハ高サニ關シテ

又樹形ヲ現ハスニ場合ヨリテ簡單ニ現今迄多年行ヒ來タレル樹幹析解ノ結果ヲ應用シテ次ノ如キ區別ヲ以テス

第一ノ完備 0.48 完備 0.47 稍完備 0.46
 中康 0.45 稍稍 0.44 稍 0.43
 第二ノ完備 0.42 — 0.41

右ノ如キ松樹形又ハ性質ニシヨリテ五級ニ分ツ一等木二等木三等木等ノ如シ而シテ一等木ニアツテハ其價立木ノ儘ニテ一圓七拾錢二等壹圓參拾五錢三等壹圓拾錢四等コ至リテハ八拾錢五等ニ至レバ殆ンド參拾錢ノ小價格トナル又當地ニ於テ測高ノ主トシテ行ハルハ比較目測ヲ用ユルニアリ比較目測トハ先第一ニ標準木トシテ適當ナル樹木ヲ点及シ精密ナル方法ヲ以テ其高サヲ測リ之レヲ帶條ノ方向ニ向ツテ目測ニテ其標準木ノ高サニ加減シツ、前進シ他ノ標準木ニ至リ此方法ヲ行ヒモシ最初測リシ高サト差引ヲ生ス

形數ナル方法ニヨリテ見出ス

ルキハ之ヲ既潤ノ樹木ニ順次割リ當テ其差大ナルルキハ再潤スルヨリ他ニ方法ナキモノトス之レ等ノ談話ヲ終リテ他再ヒ歩ヲ進メ『キルツルシ』ナル地ニ至リテ一憩ス此所モ杉樹年輪八十年生ニテ其生立セル面積一町八反歩生長ノ状態ハ栗ケ澤ヨリ甚タ劣レリ又進ム數丁『ヤセオ』ナル所ニ達ス此地ニ農科大學ノ設置ニ糧ル製炭所アリ釜ハ所謂石釜ニシテ二個アリ夫ト共ニ又木醋液製造ノ器ヲモ設置シアリタリ

釜ハ周圍及下面石板ヲ以テ閉境サレ其上部ノミ泥土ヲ以テ覆フハル釜ノ后部マツ約三寸ニ四寸程ノ小孔アリテ烟出シトナス木醋液ハ此烟ヲ冷却セシムルヲニヨリテ得ルナリ原料ハクワカシアガバシアアヲカシシラカシアセビ等ニテ之ヲ釜中ニ入ルハ先ツ樹木ヲ四尺二寸乃至五尺位ノ長サニ切斷シ『大ナルモノハ勿論切斷ス』束トナシテ釜中ニ入レマタヲ用キテ之ヲ釜ノ后部ヨリ立押し立ルニアリマタノ長サハ殆ント一丈程ナルヲ要ス此仕事終レバ直ニ点火ス火ハ釜ノ后部ヨリ除々ニ燃ヘ始メ段々前方ヘ進ミ終ニ全ク炭

トナルナリ

而シテ左ノ前方ヘ進ムニ從ヒ入口ハ除々ニ之レヲ閉シ終ニ全ク孔隙ナキニ至リテ止ム之レ製炭モ最モ必要ナルヲニテ若シ前部ノ樹木ヨリ燃ヘ始メレバ前部ハ其孔口ニヨリテ酸類ノ供給大ナルヲ以テ炭ハ酸化サレテ終ニ灰ナナルニ至ル火ノ前部ヘ進ムニ從ヒ孔口ヲ閉クモ亦之レカ爲メナリ樹木ノ炭トナル迄ニハ殆ント一週間ヲ要ス而シテ之レカ消火ヲナスニハ赤炭ノ儘釜ノ外部ヘ引出シテ所謂素灰ト稱スル灰ヲカクルナリ如斯ナスキハ良好ナル炭ヲ得通常一釜ヨリ三十四五俵ノ炭ヲ得而シテ其價ハカシ炭ニテ山地ニ於テ四貫目一俵ノ炭百俵代五拾五圓位ナリ一俵ノ價ハカシニテ五拾五錢アサ炭三拾錢ナラニテ三拾五錢乃至三拾六錢位ナリ之レ等ノ談シ皆松村氏ニ依ツテ得タルモノナリ直ニ歸路ニ付キ事務所ニ至ル茲ニテ晝食殆ント一時間ヲ休憩ス午後ノ視察ハ養鱈場及ヒ醋酸製造所ノ二ヶ所ナリ一時頃事務所ヲ出テ先ツ養魚所ヘ達ス當地ハ龜山村仁ノ澤トテ奥山ニ屬ス二年生三年生四年生ノ

三種アリテ小サキ池ニテ養育ス餌ハ小ナルモノニテ鶏卵ヲ用ヒ大ナルニハ魚類ヲ與フル由稍行キテ解卵場ニ至ル茲ニ松村氏ノ養鱈ニ付キテ談話アリ先ツ最初鱈ノ牡牝ヲ捕ヘ來リテ桶中ヘ其卵ヲ搾リ次ニ乳ヲ搾加シテ軟ラカナル羽毛ヲ以テ輕クマシリ漸次其儘放置シテ後先ツ細カキ網ノ上ニ並ヘ網ハ水桶ニ架シテ常ニ水ニ浸シ置クベシ但シ其水ハ新陳代謝セシメサルヘカヲズ斯クシテ置クヲ殆ト二十日間位ニテ卵ハ孵化シテ小魚トナル小魚ハ自由ニ食物ヲ得能フニ至ツテ始メテ池ニ移ス而シテ此孵化ニ行ク時期ハ十一月頃十二月半バ頃ニ至ル間ニテ搾卵ノ時期ハ十一月ゴロ鱈ノ當ニ産卵セントスルキハ行ヒ孵化ハ十二月ゴロヨリ一月ゴロ迄ニ及ブモノナリ當地ノ孵化ハ年々卵種五百乃至二百位ニテ其目的トスル所ノ一ノ人工解卵化標本ニシテ魚類ヲ繁殖スルコトヲ諸人民ニ教授スルニアリ此談終リテ又行クコト數丁漚面澤ナル地ノ醋酸製造所ニ至ル同所ニ製炭釜アリテ夫ヨリ發生スル炭烟ノ冷却シテ木醋液ヲ製シ此モノヨリ醋酸ヲ製スルナリ

松村氏サク酸曹連製造ノ實驗ヲ行ハレタリ先釜中ヘ木サク液ヲ入レテ炭酸曹連ヲ附加ス然スルキハ此二者中和シテ沸騰シ不紙醋酸曹連ヲ生ス此物ヲ又煮沸シテ摺伴スルトキハ除々ニタールニ分離シ黒色ニ變シ終ニ泥米狀ノ個体トナル此物ヲ鍋ニ入レ水ヲ加ヘテ煮沸スルトキハ泥米狀ハ溶解ス漸次其儘放置シ適當ナル時ニ於テ其鍋ヲ冷却スルトキハ内部ノ溶解物ハ結晶シテ白色ノ個体トナシ即チ醋酸曹連ナリ 醋酸曹連製造期ハ極寒期ヲ以テ最モ可ナリトス之レ甚ダシク冷却セシムルノ必要アレバナリ

◎山田林業巡回教師ノ演説大要

本縣ハ山又山ノ間ニ介在シテ山岳ノ地積ハ實ニ大キナモノトス斯ク其地積ノ廣大ナルニモ不拘山林ノ存在セル場所トシテ見ルヘキモノハ甚ダ備カデ大部分ハ荒廢ニ屬シテ居リマス 故ニ以後コレヲ保安林トシテ保護スル必要上先ツ之レガ調査ヲシナケレハナリマセン 最初其調査ニ

取リカ、ソタ所ガ鳳凰山ト言フ山デ此山ニハ原生林或ハ殆ソド此形ヲナシタル所ガ二千五百町歩許アリマシテ他ハ悉ク荒廢地デ其面積三千三百町歩デアリマス。如斯恐ロシキ荒廢ヲナシタルタメ年々大ナル洪水ヲ來タシ人民モ大ニ之レヲ憂ヒテ百方之レガ防禦ニ着手シ砂防工事等モ數回施行シマシタダ更ニ其効力ガナカッタ何故ニ此山地カ荒廢セシカコレ永年本縣人カ疑問トセシ所ナリシガ近頃ニ至リ始メテ其原因ガ森林荒廢ノ結果デアルト言フ事ヲ悟リ此ノ危害ヲ免レンニハ森林ヲ成立セシムルニ在ルコトヲ知リ茲ニ始メテ山林事業ノ整理ト云フ事ニ着手シタノデイス。數百年以前武田信玄公ガ山林ヲ修メント欲シ大ニ造林ノ獎勵ヲナセシカバ其當時ハ本縣ニモ美林ヲ見ルコトガ出來タノニ其以後徳川時代ニ至ルニ及ヒ山林事業ヲ輕視シ其監督不行届キトナリシヲ以テ森林ノ形勢モ一變シ殊ニ三代將軍ノ頃ヨリ土木事業大ニ勃興シ各地方ノ發達セル森林ヨリ良木良材ヲ伐採シテ江戸表へ送出セシタメニ本縣ニ於テモ此際大ヒニ森

林ヲ伐採セラレ逐次荒廢ノ狀態ニ趣イテ來リ其後柳澤甲斐守ガ此ノ地ヲ治ムルニモリ森林ノ荒廢ヲ憂ヒ大ニレカ整理ニ力メ入合權ナル制度ヲ設ケテ造林保護ノ事業ヲ行ツタ爲メニ山林ハ再ヒ良好トナリシカ明治維新ノころヨリ以後木材ノ需要甚クシク増加シ又世ノ不穩ナルニ連レテ山林ノ監視等全ク不行届キトナリシヲ以テ此ノ際ニ於ケル人民ハ將來ノ如何ヲ鑑ヘス伐ラサレハ不利益ナルカ如キ偏見ヲ以テ只管森林ノ濫伐ヲ行ツタカラ其結果ハ林地ノ荒廢トナリ爲メニ小雨ノ際ト雖モ直チニ大洪水ヲ來タシテ其損害タルヤ甚ク大リシヲ以テ遂ニ明治十五年ヲ以テ本縣林地ノ大部分ハ官地ニ編入スルコトヲナリマシタ而カモ其レニ拾ケ年間ノ大洪水ハ如何ナル大損害ヲ本縣ニ及ボシタデアロウ森林荒廢シテ現今ノ如キ悲慘ナル有様ヲ呈スルニ至リシ原因ハ尙他ニ一ツアリマス。今ヨリ殆ソド二百年前ニ於テ本縣ニ於テハ金銀銅等ノ礦物ヲ探掘シタ此等ノモノヲ探掘スルニハ莫大ノ薪炭ヲ要シ又杭木トシテ非常ニ多クノ木材ヲ要シマス

之レカ爲メニ其當時ハ木材ノ伐採カ甚ク激シカツタノデス
鐵山ニ百年ノ齡ナシ銅山ハ二百年ノ害ヲナス等ノ古言ノ如トク本縣ニ於ケル森林ハ終ニ全ク死没シテシマヒマシタソレカラ以後ノ本縣ノ有様ハ一度風雨降下スルアレハ忽チ洪水漲リ渡リ道ニ溢レ人家ヲ浸シ甚ダシキニ至リテハ田畑原野三四里ノ廣キニ亘リテ大砂原ト化セシムルコトアリマシタ現今迄ニテケル主ナル水害ハ文政年間ノ大洪水近クハ明治十五年全十八年全二十九年三十二年等ハ尤モ洪水デアリマシタ之レカ爲メ本縣ノ財政ニ及ボセシ影響ハ實ニ無量ノ損害ニテ上ハ萎微ニ下ハ枯息ニテ再舉ノ力ニ殆ソド堪ヘタル有様トナリマシタ本縣現今ノ人民ニ問フニ何ヲ尤モ恐ルハヤトセハ必ラス洪水ノ起因タル森林ノ荒廢ナリト答フルデアリマシヨウ本縣ノ森林ハ明治二十三年始メテ御料林ニ編入シマシタ夫レヨリハ又人民ガ森林ニ對スル保護ノ念全ク失セテ盜伐ヲナスコト甚ク多ク若シ拂下ゲ等ノ惠舉アルニ及ヒテハ其拂ヒ下ケ木ヲ伐

採スルヲ名トシテ殆ソド十倍二十倍ノ盜伐ヲナシタノデス。又如何ニ盜伐ノ盛ナリシカラ知ルニ足ルデシヨ。又刈敷ノ採取甚ダシク之レガ爲メニ大テニ林地ノ荒廢ヲ助勢シタノデス。本縣ノ森林ハ之レ等ノ原因ニヨリテ荒廢シマシタ之等ノ荒廢ノ結果ハ終ニ人民ノ開墾ヲ醒シ現今ノ山林事業ノ風ヲ吹キ込ダノデス。本縣ノ荒地五千町歩ノ内人工造林ヲナスヘキ地積二千町歩ニテ他ハ天然ニ之レガ成立ヲナサシムル目的デス。其二千町歩ハ年々百町歩宛造林ヲナシ二十ケ年内ニ此造林ヲ終ナケレハナラナイトイフコトニナリマシタ。而シテコノ五千余町歩ハ現今御料林ノ有様ニアレトモ實際ハ純然タル御料林地テハナク或ル範圍内ニ於テ人民ハ一種ノ特權ヲ有シテ居ル即チ一定ノ拂下木ハ一定ノ刈敷採取等ノコトデアル。之レガ故ニ其造林ヲ命セラレタル御料局ニ於テハ單ニ自カラ夫カ事業ヲ取ラズ部分法ニヨリテ縣民ヲシテコレガ當局者トナサシムルノデス。而シテ人民ト密接ノ關係アル縣ニ於テハ又夫ヲ傍見シ居ルコト能ハス即

チコレヲ助勢スルヲ方法ヲ取ラナクテハナラス夫ガ爲メニ先ツ第一ニ縣民ガ如何ノ造林ヲ企圖シ得ルヤヲ調査シ之レガ補助トシテ或ハ無代ヲ以テ苗木ヲ配附シ或ハ金子ヲ與ヘテ之ガ造林ノ事業ヲ獎勵シテ居ルノテ本縣林業ノ有様ハ大体右ノ如キ有様テスガ之レニヨリテ如何ニ本縣ノ林業ガ困難ナル事業ナルカハ略察スルコトガ出來マシタテシヨウ實ニ事業タルヤ至難至極デストテモ一朝一夕ノ事テハアリマセンガ若シモ之カ設計カ他日全ク完全セシトキハドウデアリマシヨウカ凡ソ豫期スルハ其困難モ亦愉快テハアリマセンカ 本縣ノ林業ハ一層困難ナルト同時ニ又他方ニ於テハ實ニ有望ナル事業デアルト思ヒマス大分水クナリマシタカラ今夜ハ先ツ此位テ止メマシヨウ

山梨縣技師林學士
齊藤音作君ノ演說
◎山梨縣ノ事業

ニ堪ヘナイ次第テアルソシテ迄本縣テ取ツテキタ防禦工事ハ皆消極的テ有ツタ 面シテ治水堤防二十ヶ年間ニ十五萬圓ヲ費シテ居ルケレドモ少シモ其効力カナイ故ニ多年ノ經驗上之レハ根本的治水策ヲ溝ゼテバナラスト云フコトカ知レテ山林整理ト云フ事ニ着手シタノテ有ル又本縣ノ面積ノ八割四歩ハ山林テ殘リノ一割六歩カ平地ゾ有ルカ其一割六分ノ中モ洪水ノ爲メ川床ト堤防カ多イ爲メニ完全ナ農地ト云フモノハ全地積ノ比例ト云フモノハ誠ニ少ナイ 然ルニ今迄ハ此ノ少ナイ農地ニ許リ力ヲ入レラレタノテ丁度人ノ片手ニノミ力ヲツクシタヨウナモノテ有ル故ニ本縣ノ經濟ト云フモノハ非常ニ困却テ有ル明治四年地租改正前迄トイフモノハ武田信玄ガ定メタ規定ニヨツテ年貢ヲ取ツタ其規定トイフモノハ非常ニ安クテ他ノ地方ノ半分位テ有ツタ夫レ故ニ改正以前ハ有福ナモノカ多クツタノテ有ルカ其後大變皆困難ニナツタ故ニ古ノ財產家ア今日破産ラシタモノガ甚タ多イソシテ今猶其悲運ニ向ツテ居ルモノモ有ル然シ

本縣ノ地勢ハ見ラル、通り四方山ニテ囲マレテ度摺鉢ノ様デアアルソシテ此ノ摺鉢ノ中ノ雨水ト云フモノハ富士川ノ流レ一ツヲ外ヘ運ハレテ居ル右日本武尊ノ時代ニハスリバチノ中カ皆湖水デ有ツタラシソレカ漸時變ヒシテ今日ノ様ナ有様トナツタノテアル夫レ故ニ今猶大雨カアルト夫レカ摺鉢ノ底ニ集マツテ非常ニ水景カ増シ一ツノ富士川ノミテハ運ヒ切レズ爲メニ摺鉢ノ内カ恰モ湖水ノ様ニナル洪水ノ害ノ多イ事ハ最近十ヶ年ニ於テ合計八百八十萬圓ノ損害即チ一年平均八十八萬圓デアアルノデ是レテモ如何ニ被害ノ大テ有ルト云ノコカ知ラレルソシテ今後猶其害ヲ逸フスル様ナ傾向カアル 此ノヨフデアアルカラ此ノ損害ヲ防ク爲メニ第一ニ此ノ摺鉢ノ周圍ノ山ヲ脩理スルニアルノダ 本縣テハ此ノ点ニ着目シタノテ特ニ林業ニ力ヲ入レルヨフニナツタ

其改正當時トイフモノハ山ニ林木カ多クツタ爲メニ其材木ヲ伐採シテ生活ノ助ケトシタノテ有ルケレテ今日ニナツテハ最早山ニハ木カナイ故ニ一層ノ困難ヲ來タシタノテアル爲メニ今テハ森林產物トシテ出ツルモノハ實ニ少ナイ故ニ本縣ヘ入ル處ノ汽車ハ滿載シテ來テ空車デ歸ルツマリ貨車テ縣下ノ金ヲ運出スルノデアアル 此ノ様ナ次第デ甲州ハ山國デアリナカラ木材ニ欠乏シテ居ルコトガ少ナイ實ニ夥シイ現ニ竜王ニ建築サレタ農林學校ノ用材ハ皆東京ヨリ取ツタ亦欽道ノ枕木等ハ北海道ヤ岩城カラ取り寄セタノテアル實ニ山國タル本縣テアツタ木材ノ欠亡ハ斯クノ如クニアル 故ニ本縣ノ經濟上此ノ大面積ヲ占ムル山地ヲ利用スルコト云フコトガ必要デアアルノダ之レカ山林ノ整理ヲ要スル第二原因デアアル 即チ第一ハ治水ノ目的ヨリ第二ハ經濟上ヨリ是非共森林ノ整理ヲ必要トスルノデアアル其ノ爲メニ一昨年五月私ガ本縣ヘ來テ六月ニ第六課ヲ置キ森林整理ノ大方針ヲ立テ、昨年四月カラ其方

針ニヨツテ着々進行シツ、ハアル
此山林整理ニツキ終局ノ目的如何トイフニスリ
バチノ周圍ノ山ニ夫レゾレ適當ナル材木ヲ造林
シ第二ニハ土砂ノ崩壞ヲ防キ水源ヲ養ヒ治水ヲ
行ナヒ其治マツタ水ヲ利用シテ水力電氣ヲ起シ
其電氣力ニヨリ林産ヲ製造シ其製作品ヲ賣リ出
スノテ有ル

其給供地ハ内國ハ勿論進ンテハ朝鮮、清國、西比
利亞等デアル
今日造林シタ木ノ利用期ニ達スレハ今后四十年
内外デ有ル其時ノ朝鮮ヤ支那ヲ想像スルニ領地
トナツテカ獨立シテカ兎ニ角ニ文明ニ進ムテ有
ラウ其時ハ電柱トカ鉄道トカ建築物ノ増築トカ
木材ノ需用ガ甚ハタ多イテアラウ又種々ノ用ニ
供スル爲メニ多景ノ紙ヲ要スルトカ又車枕木器
械マツチノ軸木將來非常ニ

◎伊勢四日市製糸會社
芝川分教場

常製糸會社ノ位置ハ富士川ヲ下ツテ行クト丁度
左岸ノ川岸ニアツテ中々大キナモノデアアル我々
ハ九時ニ萬澤ヲ船デ發シテ九時五十分ニ着シタ
一同上陸シテ應接室ヲ暫時待ツテ居ルト技手ガ
來ラレタノデ先ツ其處テ一應次ノケ條ニツイテ
質問ヲシタ
7 木材ノ種類 もみ つが 唐檜 白檜
2 原料ノ供給 御料林又ハ民林ノ立木ヲ購求ス
3 原料ノ價格 壹尺、二尺七八十錢——三圓
4 原料ノ最安ナルモノ一、樺二、唐檜三、シラビ
四、ツガ

- 5 一ヶ年ノ原料消費高三千五百尺
- 6 壹尺ニ對スル製糸量二百三十ポンド
- 7 原料供給地 山梨縣南巨摩郡佐野御料林
(早川水澤地)
- 8 原料ノ運搬 早川ニテハ管流シ富士川ニ入り
テハ長キハ筏短キハ舟
- 9 使役人夫數 職工人夫合シテ二百人
- 10 製紙需用地 東京 大坂 名古屋
- 11 製紙ノ種類 主ニ新聞用紙
- 12 製紙紙ノ價格新聞代價一ポンド五錢七八厘
- 13 製紙器械ノ馬力 千七百馬力
- 14 使用器械ノ製造地主トシテ外國
- 15 製紙ノ運搬 岩淵迄舟夫レヨリ汽車
- 19 原料ノ大サ 長サ一丈六尺五尺四尺
- 17 原料ノ溶解法 グラウンドバルブアルハイト
(生木ヲスリツプス法ニヨル)

(原料ヲ直ニ)
夫レカラ全生徒ヲ二分シテ各組共技手ノ説明ヲ
受ケツ、工場ヲ巡視シタ器械ノ運轉ノ音カゴ
ゴト響クノデ説明モ充分聞キ取レナカツタ

大畧次ノ如キ順序テアツタ蒸氣流籠室ニハ二個
ノ流籠ヲ具フ第一ハ水管式蒸氣流籠之レハ英國
製デプラスチック市デ出來タモノテ有ル壓力ガ八
十ポンド第二ハ煙管式蒸氣流籠式第三タイデス
イターガ有ル直徑ガ十尺高サガ二十六尺構造ハ
最モ中ヘレンダ(練瓦)ヲ積ミ其外部ヲコン
クリートニテ包ミ次ニ又鉛板ヲ張リ其外部ヲ鉄
ニテ包ンテアル夫レハ亞硫酸瓦斯ガ器械ヲ腐蝕
スルノヲ防ク爲メデアル 而シテ其内ニ木材ノ
細片壹万斤ヲ入レルヲガ出來ルソシテ其中ヘ
亞硫酸石灰ヲ入レテ十五時間燒シテ綿狀トナ
シテコノ綿狀トナリタルモノヲ乾燥スレハ五
千斤トナルトイフ

- 第四 ハ石灰石ヲ以テ「タイデスター」ヘ入レル
硫酸石灰ヲ製造スル
- 第五 グラインデストーン之レハ獨逸又ハ亞米
利加産デ周圍ガ五十二尺巾二十七吋アル
「グラウンド」バルブヲ製スルニ用ユ
- 第六 硫黃ヲ燃ヤシテ亞硫酸石灰ヲ作ル
- 第七 石灰水ヲ製造スル室

- 第八 石灰水ト硫黄トヲ合スル室
- 第九 木材ヲ細裂スル器械(器中ニ三ヶメナイ
フアリテ木材ヲ五分位ニ切斷ス)
- 第十 細裂サレタル木片ヲフルヒ別ケ「ターゼ
スター」ノ所在地ニ送ル
- 第十一 木材ヲ「グライディングストオン」ヲ以
テ摺リツブシ「グランド」バルブヲ作ル
- 第十二 水車室二百五十馬力ノ水力ヲ用キテ此等
ノ器械ヲ運轉セリ
- 第十三 「グランドバルブ」ノ液ヲ濾過ス
- 第十四 サルハイトノ原料溶解物ヲ「デーカーマ
シン」ノ網ニテ濾過ス
- 第十五 「グランドバルブ」ノ原料ヲ上方ニ上クル
器械ニテ上方ニ送ル
- 第十六 其原料ヲ毛布ノ上ニ導キテ水分ヲ取り板
狀ノモノトナス
- 第十七 「サルハイト」ト「グラウインドバルブ」トヲ
混交機伴シ之レニ色素(着色料)ヲ加ヘテ
有色ノモノトス
- 第十八 混交溶解物ヲ「ポンプ」ニテ他器へ送ル

- 第十九 其送ラレタル溶解物ヲ「タンク」ニ入レ攪
伴シテ之レヲ濾過ス
- 第二十 此ノ混交液ヲ毛布上ニ導ヒキ重力ニヨリ
水分ヲ滴下セシメコ、ニ始メテ紙ノ体裁
ヲ作ル
- 第二十一 摩擦ニヨリテ紙ノ体裁トナリタルモノ、
面ヲ平ラカニナス
- 第二十二 尙一層紙面ヲ滑ラカニシテ水分ヲ去リ之
レヲ毛布上へ移ス
- 第二十三 之レニ壓力ヲ加ヘテ²⁰迄水分ヲ去ル
- 第二十四 蒸溜ヲ充滿セシメタル二十四ヶノ連續セ
ル口筒(鉄製)ニ卷キ付ケ全ク水分ヲ除去
ス
- 第二十五 水分ヲ除去シタル紙ニ「ハレンダー」氏ノ
器械ヲ以テ光澤ヲ付ス
- 第二十六 「ハレンダー」氏ノ器械ニヨリテ光澤ヲ付
シタル紙ヲ他器ニ卷キ付ケ切斷シテ紙ヲ
作ル

◎天城施業案の編成

今晚御話致し事は施業案運用の事小就きて御話
致さうと思ふのである。諸施業案を編成するに
如何なる方法によりてやるかと言ふに先づ施業
案を組み順序とて其林地を林班(又は區劃班)
及び林相班の二つに分ちて各班の材積を調べる
のである。之れを調べるに之を各班に各標準地な
るものを設け又之れの内を標準木なるものを設
け之れを伐採して標準地の材積表を造り此の表
によりて其材積を調べると又は毎木を調査して
之れにとるとの二つの場合がある。而して此れ區
劃班林相班は其林地が大面積なれば一反歩位と
し標準地の個數のなるべく多く取る面積が三十
町歩との五十町歩とか言ふ様な小面積である時
は二三ヶ所取れば善いのである。此等は重木に難
木林に就いての方法である。今日で之の材積を
見るに立木の儘毎木の調査をまて全林に總材積
を出去之れを賣買に附するのである。而して施
業案を組むには此林に何程の材積があるかを

調べるのが主なる基となるのである。又施業案
を組み前に當りて土地の仕事を前業と後業との
二つに別ける前業の方法は第一に土地の側量で
ある此の土地を側量するにつきては其の林地と
他の林接地との間あつて境界を査定するの必要
なる場合が起る。依て林接地主と立會ひ協議の
上之れが境界を定むるのである。若くは此の境界
が判明でない時は施業案は組む事は出来ないので
ある。此の境界の査定が終れり内部の細形側量
をなすのである。此の細形側量が區劃班と林相
班と言ふものになるのである。是等の側量を終れ
ば地質の調査をやる夫れは其地質を先づ礫土、
土、土砂質、壤土、粘質壤土等に分ち又土地の成
状につきては乾燥と濕潤とによりて乾、稍乾、適、
稍濕潤、極濕潤とによりて五階に分ち林地も亦
形態によつて丘陵、山岳、平地、險に分ち四十五
度位の處は險の内へ入れあらゆる状態を調べ一
々帳簿に記載す之れを記載したる物を林地簿と
名付多面積を調べたるものを面積簿と名づけ此
の二つを合せて施業案を作る。又面積比測定と同

時に基本圖及び林業圖を作る林業圖は仕事の運用を謀るの爲めに製する此の外は造林基案なるものかあつて之れによりて年々何程の植栽又は伐採をすれば宜敷かを見る事を得るものである施業案の編み方は種々あるが今御料局でやつて居るのは材積平分法と面積平分法との二つある之れを總合して一つの案を立てたるも乃が折中平分法となす而して天城山は區劃擇伐によりて施業案を作す林伐期は八十年と云ふ二十年を以て一期間としてある此乃天城で編みたるも乃は明治三十三年である依て其習年の三十四年より實行するものとすれば五十二年にて終るべである之れを一期と云ふ更に之れを二つに分ちて一つの前期と云ふ他の一つの後半期と云ふ前後兩年期は各十年に分ち一期の前半期は三十四年より四十四年目迄後半期は四十四年より五十四年に至るまで、二期の前半期が五十四年より六十二年に至る間以下皆右の如くで四期を以て終るのであるが長き間を見込んでやるのであるかゝ種々の天災や損害等に罹る事あり

るを以て能く實際と對照してやるのであるかゝ一期の前半期の終るのも充分御調ふべでない様ですのら先づ天城に施業案に就きては大體斯様の次第であります
御料局天城出張所技手葛西氏ノ演説

◎農科大學附屬千葉縣下演習林

第一 一 般

千葉縣下ノ實習林ハ面積凡ソ卅千壹百步房總ノ國境ニヨリテ清澄及奥山ノ兩部ニ分ツ本林ハ主トシテ致官學生ノ研究并ニ學生々徒ノ實習用ニ供シ傍ラ林業上ノ模範林トシテ廣ク世人ヲシテ合理ノ林業ヲ實際ニ知見セシムルヲ以テ目的トシテ居ル清澄山ハ房州天津町字清澄ニアリテ海岸ヲ距ツル事壹里有余有名ナル清澄山ノアル處デ海拔高約三百メートル遙カニ太平洋ニ面ス本林ハ常綠闊葉樹帶ニ屬シ主要林木ハ杉及もみナ

リ杉ハ何レモ人工植栽ニ係リ年度階級ノ排列未ダ全ク宜シキヲ得ズト雖モ現今良好ナル純林凡ソ八十町步余アリテ其最老ナルモノハ百餘年生ニ及ヘリ樅林ハ天然林ニシテ或ハ純林トナリ或ハ上木林ノ上木トナリ混交林ヲ形成ス純林ヲナスモノハ僅カニ五町步ニ過ギサルモ林齡九十年ニ達シ本郡ニ於ケル樅林中ノ上位ニ居ルモノトス又雜木林ヲ形成セル主要ナル樹種ハあかぎこなどニシテ其他七十餘種ノ常綠及ヒ落葉闊葉樹ヲ混生セリ其面積ハ凡ソ六十六町步アリ此他ハ何レモ針潤混合林或ハ点生地及ヒ未立木地ニシテ林相甚タ正平ナラサルモノ多シ現今全林ヲ通シテ針用樹材積約十四万尺ノ潤葉樹材積約三千九百棚アリ本林ハ明治二十七年農科大學ニ屬セシ以來林地ノ測量林相ノ區劃ヲナシ之レニ從テ經理上必要ナル十五林班及ヒ數多ノ小林班ヲ設ケ採採列區ヲ整ヘ施業按ニ基キ毎年ノ收穫及ヒ造林ノ方法ヲ規定セリ又從來末ダ斧斤ノ入ラサリシ一區ノ地凡ソ四町步ヲ以テ禁伐林トナシ永ク天然林ノ本色ヲ維持シ林學上ノ參考ニ資セ

第二 作業ノ種類

本演習林ハ清澄及ヒ奥山共ニ現時ノ不規則ナル針潤葉樹ノ混交林ヲ變更整理シテ地勢ノ許ス限

リ杉及ヒ扁柏ノ純材若シクハ此兩者ノ混交林トナスヲ以テ主方針トス只傾斜急峻ニシテ地被淺ク或ハ岩石露出シ杉扁柏ノ造林ニ堪ヘサル個所ニアリテハ強テ人工植栽ヲ爲スモ好果ヲ見ル能ハサルノミナラス却テ崩壞ヲ促スノ原因トナルカ故ニ之レ等ノ地ハ中林及ヒ矮林タル現狀ヲ維持シ濁葉樹ノ根株ヲ殘存セシメ適宜ノ伐採ニヨリ又ハ種子ヨリ發生セシメ稚樹ノ保育ニヨリテ地敷ノ視離ヲ防備ス可キナリ勿論最モ急峻ナル絶壁地ニ至リテハ全然除地トシテ作業以外ニ置カサル可カラス而シテ現作業法ノ變更期ニ付テハ最モ注意ヲ要ス可キ事ニシテ現在中林若シクハ矮林トシテ施業シツアルモノナルガ故ニ年々伐採面積ニ相當スル地積若シクハ之レヨリ幾分大ナル地積ニ向ツテ造林ヲナス可キナリ依テ之レガ爲ニハ先ツ輪伐齡及ヒ間伐期年ヲ定メ然ル後年々ノ植栽面積ヲ定ムルヲ要ス其輪伐齡及ヒ間伐期年ハ後ニ述フル如クニシテ即チ

一 間伐期 三十年
 二 間伐期 四十年
 三 間伐期 五十年
 四 間伐期 六十五年
 奥山々林中將來杉(扁柏共)ノ喬林トナシ得可キ地積ヲ全林地ノ約七〇プロセント尙トスル時ハ千三百二十町歩余ナリ而シテ今之レヲ五十ヶ年ニ全部植栽スルモノトセハ一ヶ年ノ造林面積二十六町四反歩トナル之レ宛モ矮林ノ二代伐期間ニシテ且ツ第三ノ間伐期ニ相當ス故ニ矮林面積ノ二分ノ一テ年々植採シテ可ナリ且今后第五十年ニ已ニ十分間伐收入ヲ得可キナリ

第三 輪伐齡
 本演習林ニ於ケル杉林ノ輪伐齡ニ付テハ從來數回ノ試驗調査ヲナセリ今其結果ヲ擧ケンニ明治三十年ノ清澄施業區ニ於ケル調査ニヨレバ七十年乃至八十年ヲ伐期トセバ最モ大ナル利益ヲ收得ス可ク又奥山第四施業區ニ於ケル調査ニヨルモ七十五年前後ノ伐期ニ於テ最大收益ヲ得ル事ヲ發見セリ之レニヨリテ本演習林ニ於テハ可成

伐 期 八十年

大村ヲ生産センガ爲メ八十年ヲ伐採期ト撰定ス

| 間伐年度 | 間伐度 | 間伐材積尺 | 單價 | 間伐收入 | 間伐收入後價 |
|------|-----|-------|----|--------|----------|
| 30 | 10 | 71 | 30 | 28.80 | 205.94 |
| 40 | 15 | 189 | 35 | 66.15 | 384.76 |
| 50 | 9 | 157 | 40 | 62.80 | 225.21 |
| 65 | 12 | 273 | 60 | 163.80 | 317.00 |
| 計 | | | | 815.55 | 1,142.91 |

但シ間伐度ハ清澄山杉林三等主伐材料ノ間伐材料ニ於ケル百分率ヲ示ス

今本表ノ結果ニヨリ間伐收入ノ後價合計ヲ主伐收入(伐期八十年ニシテ單價圓四十錢)ニ比スレハ三二、プロセント、ナル

第四 收入豫定

全演習林ニ於ケル生産地面積ヲ清澄山ハ三百町歩奥山ハ壹千八百町歩ト概算シテ將來杉若シクハ扁杉ノ人造林トナル可キモノ及ヒ矮林又ハ中林トシテ保存ヲ要スル地積ヲ豫定スルニ約次ノ如シ

- 清澄山 杉扁柏林 二百八十町歩
 - 矮中林 二十町歩
 - 奥山 杉扁柏林 千三百二十拾町歩
 - 矮中林 四百八十町歩
- 今之レニヨリ將來全林ノ造林完成セル時期ニ達セハ次表ノ如キ收入ヲ得可キナリ

第五 造林附苗圃

明治二十七年以來清澄山ノ演習林トシテ交附ヲ受タルヤ翌春直チニ之レガ造林ニ着手シ爾後年々植栽シテ現時殆ンド未立木地ヲ存セス其二十八年以降三十四年ニ至ル間ニ造林セシ面積ハ七十五町歩余ニシテ主トシテ杉扁柏ヲ植栽セリ奥山演習林ハ明治三十四年春季始メテ植栽ニ着手シ二十六町余ノ面積ヲ造林セリ以上ノ地清澄山内十二町五反歩餘ハ見本林トシテ内外國各種ノ樹木ヲ植栽セリ

本演習ニ於テ植栽スル杉及ヒ扁柏ハ通常三年生苗ヲ用ヒ壹町歩三千五百本及ヒ四千五百本宛トシ樹種ハ其地質地勢ノ許ス限リ杉ヲ擇ヒ嶺通リハ扁柏ヲ混植シ又甚シク乾燥スルヶ所ニハ松ヲ植ニ而シテ從來造林ヲナスニハ其苗木ヲ農科大學林學科ノ苗圃ヨリ運搬シ來リ或ハ演習林附近ニテ購買スルモノヲ用ヒタリ然ルニ奥山ノ編入以來其第四施業區ノ中央ニ當レル平坦地ヲ撰定シテ此處ニ苗圃ヲ設置セリ郷臺畑(猪ノ川臺)苗圃即チ之レナリ苗圃ハ合計二町三反歩畝歩ノ

| | | | | |
|----|-------|--------|----------|---------|
| 林種 | 生産面積町 | 輪伐期年 | 一町歩ノ伐採量尺 | 單價 |
| 杉 | 1,600 | 80 | 2,598 | 1,75 |
| 扁柏 | 500 | 下木 25 | 下木 32 | 下木 1.50 |
| 中林 | | 上木 100 | 上木 80尺 | 上木 0.50 |
| 合計 | 2,100 | | | |

| | | | |
|----------|---------|-------|----------|
| 一町歩ノ伐期收入 | 壹町歩ノ間收入 | 年伐面積 | 壹年間ノ總收入 |
| 454.650 | 315.55 | 20 | 9.7.241. |
| 下木 48.00 | | 下木 20 | 下木 260.0 |
| 上木 40.00 | | 上木 5 | 上木 200.0 |
| | | | 9.8.401. |

備考單價比較的高價ナルハ將來林道ノ完成ヲ豫期セルニヨル杉扁柏ノ配付比較的不明ナレバ凡テ杉ノ材料ニヨリス杉ノ第三等地ヲ以テ算セシガ故實際收穫スル材料及ヒ價格ハ之レヨリ増加スルモ減少スルノ憂ナシ

地積ヲ有スル一面ノ平坦地ニシテ元ハ樺等ノ天然林ナリシガ明治三十三年之レガ開拓ニ着手シ現今ハ全ク完成セリ土壤豊饒ニシテ甚ダ苗圃ニ適當ス而シテ全演習林ニ於テ要スル苗木數ハ壹町歩四千本植トス

奥山 拾万八千本 但シ千三百五十町歩ヲ五十年ニ植栽ス

清澄 壹万四千本 但シ貳百八拾町歩ニ對シ年々三町五反歩ヲ植栽ス

計拾貳万二千本

外ニ補植苗貳萬貳千本ト見做ス

合計拾三万四千二百本

第六 演習林ノ施業

本演習林ノ地勢タル峯巒起伏シ嶺谷相續キ多クハ天然原生林ノ遺物ヲ存シ林木ノ成立ハ極メテ繁雜加フルニ古來不規則ナル人工植樹ヲ以テセルガ故ニ益々林相ヲ錯綜セル狀態タラシメシ事ハ一度清澄山林ノ林相圖ヲ繕ケバ詳ラカニ之レヲ知ルヲ得可シ之レガ爲メ施業ノ計劃又甚ダ困難ニシテ其主方針ハ全部人工植樹ニ依テ改良整

理セシトスルニアリト雖モ之レガ實行ニ當リテハ地勢地位ノ許サザルアリテ純然タル理想的ノ林相ヲ形成スル事容易ハ業ニ非ラズ從テ學生ノ演習ニ供ジ極メテ困難トスル所ナリ然リト雖モ我國森林ノ大多數ハ何レモ本演習林ノ如キ亂雜ナル天然林ヲ整理スルニアルガ故ニ我國ノ森林教育ヲ受クルモノ一度ハ必ず此錯雜ナル森林ノ施業ニ就テ學ハサレバ其學藝ヲ應用スル事能ハズ又本郡森林教育ノ輻軸トシテ立ツ本學ノ如キハ此ノ如キ最モ困難ナル林相ニ向ツテ學術ノ應用ヲ施シ之レガ模範ヲ世ニ示スノ責アルモノトス

本演習林ノ施業ハ經理上ヨリ云フキハ全林ヲ一施業區トナスヲ至當トス然リト雖モ學生ヲシテ實際施業按編成ノ習ヲナサシムルニハ過大ニ失スルヲ以テ便宜上天然ノ地勢ニ從ツテ之レヲ五個ノ小施業區ニ細分セリ即チ清澄山ヲ一施業區トシ奥山ハ之レヲ四施業區ニ分割セリ然レモ其施業按ハ全林ヲ一括シテ編成ス可キハ勿論ナリ清澄施業區ハ舊清澄山ノ全部ヲ包有シ其面積

三百二十七町六反余アリ其内立木地面積二百四十四町二反步未立木地五十九町四反步餘ト除地二十三町九反餘歩アリ而シテ除地中ニハ内外樹種ノ見本林ニ充ツルモノ拾二丁五反歩餘天然林ノ標本トシテ存置セル禁伐林五丁一反餘歩アルヲ以テ純粹ノ除地タルヘキ道路川流防火線等ノ面積ハ僅カニ六丁二反餘ニ過キス尙其立木地面積ヲ更ニ林相ニヨリテ區別スレハ次ノ如シ

- 杉純林 一〇、町四四二三
- 扁柏純林 一、町七六一八
- 松純林 三、町七四二〇
- 落葉松純林 〇、全七二〇〇
- 樺純林 三、全六〇一八
- 杉扁柏混交林 〇、全九三〇六
- 杉花柏混交林 四、全九七二一
- 針葉樹混交林 六、全一五二五
- モミ、マツ、スギ
- サツラ、ヒノキ等
- 不正ニ混交ス
- 針葉樹混交林 一九、全〇六〇四
- 中林 二五、全二八〇二

矮林

九七、町五七〇二

以上ハ明治三十年ノ調査ニ依レル立木地ノ面積トス然ルニ爾來未立木地及ヒ矮林中林伐跡地ニ頻年造林セルヲ以テ杉扁柏ノ純林若シクハ混合木ヲ増加セリ即チ明治三十年ヨリ同三十四年ニ至ル造林地積約五十町歩ニシテ内未立木地ニ造林セシモノ三十五町歩餘又矮林中林ノ杉林ニ改造セラレタルモノ約五町歩餘故ニ現今ニテハ杉扁柏等ノ純林若シクハ混交林約百二十丁歩以上ニ至レリ

明治三十年ノ施業按ニヨレバ全施業區ヲ十四ノ林班ニ分チ其區劃線ハ主深峯ニヨリ所謂天然ノ地勢ニ從ヘリ而シテ其小斑區劃モ又一小溪流テ包圍シテ羅敷ス可キナレ如何セン從來合法ノ作業ニ依テ管理セラレサリシ結果或ハ必要ニ應シ濫リニ斑々伐木セラレテ穴隙ヲ生シ或ハ尺寸ノ圍地ニ隨所造林シ又稍々大面積ノ造林地内ト雖モ老木ノ孤立木ヲ殘存セシメ若シクハ數本ノ團生木介在スル等實ニ亂雜極マル林相ヲ呈セリ即チ其小斑ノ亂雜ナル林相圖及ヒ林況調査ニ照

シ見レハ明ラカナリ之レガ爲メ三々后數十年ノ後ニ非レバ林地區劃ヲ整然タラシメ合法ノ伐採列區ヲ配置シ林相ノ美觀ヲ爲スニ速スル能ハザルベシ

奥山ハ明治三十一年東京大林區署ヨリ交附ヲ受ケタル當時ノ調査ニヨレバ其面積一千八百三十六町步餘アリ其第一施業區ニ屬スルモノハ荳和田畑ノ民地界ヨリ南ニ向ヒ小櫃川上流(即チ七里川)ノ東岸ニ位シテ四方木民地ノ包皮ヲナシ其面積四百町步アリ字獨川去ル暖流ノ兩岸ニ沿フテ民有水田深ク崙有シ大部櫻梅松及ヒ雜木ノ混交中林ニシテ字郷田倉ニ東京大林區ニ於テ造林セル二十町歩ノ杉林アリ第二施業區ハ第一及ビ第三施業區ノ南端ニ接續ス實ニ小櫃川ノ泉源ニシテ恰モ四方木民地ノ冠帽ヲナス而テ其東南部ハ彼ノ墨引界ニヨリテ清澄施業區ニ境シ面積約五百町步アリ林相又第一施業區ニ同ジト雖モ上木タル針葉樹比較の少ナク下木タル雜木密生シ又製炭用トシテ最モ重用セラル、櫛類多ク地味豊沃成長佳良ナリ明治三十四年春季字大仙場

二十九町歩ノ杉ヲ造林セリ第三施業區ハ第二施業區ノ北方ニ位シ第一施業區ト小櫃川ヲ狹ンデ相對シ面積約四百五十拾町步アリ第四施業區ハ第三七業區ト一ノ主峯(加勢道)ニヨリテ分割セラレ即チ猪ノ川流域ノ一帯ヲ包有シ之レニ土澤ノ全區ヲ添加シ内部民地ノ介在スルナク殆ソント板形ヲナシ地形上最モ好適ノ施業區タリ其面積ハ五百四十二町八反餘アリ

◎東京帝國大學農科大學千葉縣奥山演習林設制報告

明治三十六年調査ニ係ルモノ、概要ヲ示サンタメニ其目次ノミヲ示スコト左ノ如シ

目次

第一章 森林ノ實況 第一節 地況

第一款 位置及地勢 第二款 地質

第一 基岩ノ種類及分布

- 1 基岩ノ種類及性質
- 2 地層ノ分類及分布
- 第二 土壤ノ成分並ニ物理學の性質
- 1 定積土 2 澱積土
- 第三款 氣候
- 第一 溫度 第二 濕度
- 第三 降水量 第四 風附暴風
- 第五 霜附霜柱 第六 天氣
- 第二節 林況 第一款 作業ノ種類
- 第二款 樹種
- 第三款 森林内外ノ通情
- 第一款 森林行政ニ關スル事
- 第一 所有及所管ノ沿革
- 第二 過去ノ森林制度並ニ取扱法
- 1 松平氏時代 2 西尾氏時代
- 3 縣廳管轄時代 4 森區管轄ノ時代
- 第三 森林所在地方ノ管轄區劃
- 第四 境界及接續地方ノ狀況
- 1 東部境界 2 西部境界
- 3 南部境界 4 北部境界

- 5 内部境界
- 第五 地理上特有ノ狀況 第六 森林ニ對スル地元村民ノ慣行
- 第二款 森林保護ニ關スルノ 第一 過去ニ於ケル森林ノ災害 第二 過去ニ於ケル野獸ノ狀態 第三 森地犯罪
- 第四 現今森林ニ對スル保護
- 第三款 森林經濟ニ關スルノ
- 第一 重要林產物商業ノ現狀
- 1 賣即分法 2 大森林ノ林產物賣却方法
- 其一 普通競賣法 其二 特賣法
- 小林ノ產物賣却分法 市場ノ狀況
- 鴨川市場 附東條林 天津地分 小湊市場
- 久里里市場 夷隅郡市場一斑
- 第二款 運輸機關ノ現況 1 房總半島ノ現況
- 1 陸路運輸 2 水路運輸 海洋運輸
- 河川運輸 奥山演習林ノ現況 東部
- 陸路 其一 久留里天津間縣道 其二 東部林道
- 其三大田代清澄間里道 其四 鄉台畑清澄間林道

水路 西部 其一和勢道 其二草原原道

- 其三和泉村里道
- 運搬費 1 陸運 2 水運 第三其他必要ノ事項
- 1 木材ヲ消費スル工業製造業等 2 木材代用品ノ影響 3 地方ノ木材需要 第四 勞働者ノ關係
- 第五 過去ニ於ケル枚產物搬路及價格概要
- 第四款 其他ノ參考事項 第一 既往ニ於ケル収支
- 第二 森林所有者ノ要求 第三 森林所有者ノ財政上能力 第四 人事上ノ關係 第五 地元村民一般民情 第六 附近林業ノ狀況
- 1 面積 2 林經學法 御料林 國有材 民有林
- 第二章 將來ノ施業
- 第一節 將來ノ作業法樹種輪代期ノ決定並ニ作業法變更ノ時其月ヲ定ムルヲ 第一款 將來ニ於ケル作業法ノ決定 第二款 樹種ノ撰定
- 第三款 輪代期ノ決定 第四款 作業法變更ノ時期ヲ定ムルヲ
- 第三節 將來施業上ノ意見

第一款 森林保護ニ關スルノ

- 人爲ノ害ニ對スル保護
- 第一 境界ノ保護 第二 森林犯罪ニ對スル保護
- 第三 天然ノ害ニ對スル保護
- 1 森林火災ニ對スル保護
- 第一 土壤ノ崩壞並ニ流出ニ對スル保護
- 第二 氣象上ニ對スル保護
- 2 溫度ノ低下ニ對スル保護
- 溫度ノ升高ニ對スル保護
- 暴風ニ對スル保護
- 霖雨及強雨ニ對スル保護
- 雪雹ニ對スル保護
- 第三 植物ノ害ニ對スル保護
- 第四 動物ノ害ニ對スル保護
- 第二款 將來ノ森林仕立法及撫育法
- 第一 森林仕立法
- 1 杉ノ喬林作業 苗木ノ供給 植付地ノ地拵 植付ノ種類 植付ノ季節 植付法 補植及下拵

附錄 半地質記 緒言

第一章 地形論

第一節 山誌及水系 第二節 地貌論

第三節 地形と地質との關係

第二章 地質論

第一節 岩層ノ配置及分布

第三化層ノ配置及分布 小礫層 三石層 清澄層 白岩層 真根層

第四紀層ノ配置及分布 洪積層 沖積層 風化土層 厚層

第二節 岩石ノ種類及性質

第一款 岩石ノ種類 1 真根ノ層質 2 白岩及三石質 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第四款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第五款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第六款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第七款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第八款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第九款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十一款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十二款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十三款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十四款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十五款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十六款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十七款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十八款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第十九款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十一款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十二款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十三款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十四款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十五款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十六款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十七款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十八款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第二十九款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三十款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三十一款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三十二款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三十三款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

第三十四款 岩石ノ性質 1 真根層 2 白岩及三石層 3 清澄層 4 小礫層 5 洪積層 6 沖積層

2 扁柏ノ喬林作業 1 喬林 除代 疎代 技下シ

2 矮林 第一路線 1 苗圃連絡線 2 四郎治道 3 東境主線 4 鳥井澤道 5 黄和田畑内道 6 熊野祠道 7 古河道 8 濁川道 9 中澤前澤境界道 10 中澤畦道修理 11 前澤ノ修理 12 和泉道ノ修築 第二豫算概額表

第四節 原野處分問題 第一成立及現今ノ状態 第二經濟的關係 第三土性及森林保護上ニ及ボス關係 第四處分分法

第五節 雜記

第一款 施業按實行上ノ意見

第二款 施業按編成ノ功程及經費

第三款 苗圃記事

簡表 1 森林面積簿 2 森林調査簿 3 齡級表 4 地位及級數 5 林木位級表

6 施業基按 7 造林基按 8 過去ノ收額表 9 收額豫算表 圖 1 基本圖

2 林相圖 3 施業圖 4 理想圖 5 位級圖 6 地形圖 7 地質圖 8 位置圖

第三大斷層ニ就テ其一大斷層トセシ理由

其二斷層線ノ成圖 第三大斷層ノ狀態及其影響

第三章 立地學上ノ關係

第一節 土壤ト植物トノ關係

1 亦松ノ生長ト各地層トノ關係

2 亦松ト峯ト谷トニ於ケル生長ノ比較

第二款 縱ト各地層トノ關係 1 分布ト地層トノ關係 2 各層ニ於ケル生長比較 3 峯ト谷トノ生長比較

第三款 櫻ト各地層トノ關係 1 分布ト地層トノ關係 2 各層ニ於ケル生長比較 3 峯ト谷トノ生長比較 附植樹ニ就テ

第四款 杉ト各地層トノ關係 1 生長ト各地層トノ關係 2 峯ト谷トノ生長比較

第二節 植物ト地貌トノ關係

第一款 氣候ニ關スル事

第二款 地勢ト氣候トノ關係

第三款 氣候ト林木トノ關係

第四款 地勢ト林木トノ關係

第五款 氣候ト土地トノ關係

第六款 地勢ト土地トノ關係

第七款 氣候ト土地トノ關係

第八款 地勢ト土地トノ關係

第九款 氣候ト土地トノ關係

第十款 地勢ト土地トノ關係

第十一款 氣候ト土地トノ關係

第十二款 地勢ト土地トノ關係

第十三款 氣候ト土地トノ關係

風化ノ度 1 凝灰岩 2 凝灰質構泥岩 3 板

泥岩 4 凝灰質砂岩 霜柱ノ關係

地質附錄 地層ト流水トノ關係 櫻杉生長調

査表 乙生物篇 第一章 植物 第二章 動物

生物篇 植物 甲裸子類 松柏

1 松杉科

あかまつ くろまつ ひめまつ もみ つが

すぎ あすあろ ひのた さはら

2 公孫樹科

ホヤ いぬホヤ 乙裸子類 第一木本類

1 胡桃科

ねにぐるみ のくるみ

2 楊梅科

やまもも

3 楊柳科

いはやなぎ しばやなぎ ゆりやなぎ あかし

バやなぎ

4 藥麻科

やな花いちぢ

5 樺木科

して三ぬまで やしやふし さはひば はん
 の袋
 6 穀斗科
 くり 玄ひ こなら たほなら みづなら あ
 かがま あらかし ころかま 空らしろか
 つくねかし いちゐるし
 7 楡科
 はるにん ゑのき けやき むくゑのき
 8 染料科
 かりま 久は いぬびは ひなかうま いたび
 めづ
 9 樗寄生科
 まつぐみ いのきばやどりま
 10 木蘭科
 はのき あふま しきみ びなんのつ
 11 雲葉科
 木つふ ふさゝまふ どりもちのま ミやまは
 ん ーやうつる
 12 小蘗科
 むさ二へびのほふす

13 樟科
 中ふにつけぬ くすのき いぬくす あをか
 くらもま やはかすばし ぬなくのき し
 ども ばりばり乃き あふらちやん かおのき
 14 海桐科
 とべら みやまどべら
 15 金縷梅科
 みつき いすのき
 16 虎耳草科
 うつき ひろばうつき ぼうはうつき ぼる
 うつき ぬめうつき のりうつき ばいくわ
 うつき さはあぢさゝい うくうつき あまぢや
 き たまほぢさゝい いばがらみ
 17 薑科
 ゑんぢゆ はぎ のはぎ れむのた まるばは
 た きはぎ いぬはま しやまついら ゆり
 のき
 18 芸香科
 こくさぎ さんせう いぬさんせう よもさん
 せう からせさんせう みやまじきミ うちは

19 薔薇科
 ーみやはまきみ
 こ、めうつき かなめ かまつか ラーころし
 やまぶき きいちぶ のいばつ むめ やまぶ
 くら まめさくら うはひせさくら はりちれ
 ま りんぼく あつきなし ころいちぶ はす
 のはいちぶ しひうり じもつけ てうぢさく
 へ ひかーさくら
 20 金縷桃科
 たんしびい
 21 大戟科
 あふらさり もつりは あかめかしめしら委
 22 苦半科 にさき
 23 毒空半科 どやうつき
 24 漆樹科
 ふしのき はせのき ぎるし やまうるし
 25 冬青科
 もちれき いぬつけ びんもど花 うとあ 久
 ろかねもち なしじれた ふぎりんうめもま
 26 衛豫科

おしきや まさき せゆみ つくばな ひろは
 つくはな つるうめもまき
 27 省治油科 みつらうつき しょうべんの花
 28 田麻科 じなのた
 29 咆吹科 ぼんた あをかづら
 30 山茶科
 つはき さかき ひさかき あがはづひさかき
 31 槭樹科
 ちどまのた おへて うまんだかへで ときは
 かへで むらりのき はながへで あまひかへ
 で いたやかへで
 32 旌節花科 きよま
 33 椿科 いさり
 34 なつくみ あきくみ ひねはくみ つるく
 み まるはくみ なたまねぐみ
 35 五加科
 やつあ むくれみの うまぎ たらのき はな
 いかだ はりはり
 36 山菜蓴科
 あをき やはほらし きんまゆ うりのき

37 金法科 とらうふ
 38 見南科 とらうふ
 ねら姿 たまのし みつはつ、し、ゆせび
 きの姿 しやいんほ こよつ、し
 39 柿樹科 たまが姿 か姿 まめが姿
 40 青敦果科 江こ乃姿
 41 木犀科 どぬりこ ひら姿 はぼた たは
こいほた
 42 馬鞭草科 ひくさぎ ひらさぎ したぶ やふ
ひらさぎ ひらさぎ むらさぎ
 43 忽冬科 さんおーゆ かまめみ おはのかは
にはどお つみ はこぬう たほかめのみ えふ ま
り つく ねう つき うく ひ ま くら きん さ
な ぼく た に う つ ぎ す は か つ ら
 44 瑞香科 みゆまた らんび れに し ばり
 45 檀香科 つえばね
 46 菊科 なむば の あ ち や ば ら き か う え ら う き
 47 茜草科 ありどう から す け か ま づ る
ま お づ の き

48 尿半科 くるばい さ い ふ た き は い の き
 49 無菓子科 むを 法 玄
 50 茄科 くこ
 51 金桑園科 せんりとう
 52 繁金牛科 いす 筋 なり と ま ん り よ 字 や
ふ こ う 玄 た い し ん た ち ば な
 53 錦葵科 も を け
 54 葎季科 けん ぼ な り
 單子葉門 1 禾本科 は お ね た け あ ま い ぎ る
ま さ め た け や た け ね ぎ
 第二蔓類 双葉木本類 1 桑科 いた ひ か そ ら
 2 木蘭科 ひ な ん か づ ら 3 半通科 む べ た け
び み つ ば あ け び こ や 字 あ け び 4 五加科
き つ た 5 豆科 ち や ま つ い ば ら ふ ち を す
 6 漆樹科 つ た う る し 7 葎季科 く ま や な ぎ
 8 衛豫科 つ る ま さ た つ ら う め も ど き
 9 葡萄科 つ た や は ぶ どう 姿 と し え し の ふ
 10 胡類子科 つ る を み
 11 猿猴桃科 し ら く ち づ る ま た い び
 12 忽冬科 す い か づ ら

13 虎耳草科 こ う う つ る い は か ら み
 14 薔薇科 つ る い ち ぶ
 15 冬春科 つ る つ け
 16 防巴科 つ く ら ふ ち
 單子葉 木本類 1 百合科 さ る ど り い ば ら
 双子葉 草本類 蒴蘆科 か ら す う り
 單子葉 草本類 薯蓣科 や ほ の い も
 第二章草本類 双子葉 1 藥麻科 か ら む え
く さ は を い ら く さ う は み せ さ う 2 十字科
な つ な 3 莖科 けん げ む す び と は ぎ の ゑ
ん ど う う は あ や ー 4 五加科 う ぜ 5 虎耳
 草科 ゆ き の ま た い は ゆ き の ま た 6 車前科
た ほ こ 7 薔薇科 わ れ も お う え さ い ち お
へ び ぬ ち お 8 形科 せ り み つ ば ど く せ
り や ぶ ぢ ら ミ 9 見竹科 か は ら な で う こ
い こ へ 10 菊科 よ も ぎ か は ら も も ぎ よ め
よ ま を ん の あ ぎ ミ ふ ち や ま こ ぼ る は こ
こ く さ の こ さ り さ う は ん が
う さ み や ふ れ が 姿 は ま
う ら ば り

11 唇形科 を ど り こ さ う や ど あ の き や ま ち し
い ぬ は つ ら ち お く の か ま の ふ た
 12 蓼科 いた ど り み つ 花 す い ば
 13 枚科 き つ こ ろ や た る ふ く ろ
 14 罌粟科 け ま ん き げ ま ん ち や ん ば き く
 15 野牡丹科 の ぼ た ん
 16 鹿蹄草科 い う れ い そ う
 17 酢漿草科 か た ば み
 18 玄參科 い ぬ れ く り
 19 牛科 けん の ま よ う こ
 20 三日草科 く ま た み
 21 旋花科 ひ る か は
 22 大戟科 ち い く さ
 23 麻科 ふ え ち ら ん
 24 毛茛科 き く ば を う れ ん つ り の ね う り か
ら ど き く き ん が り け
 單子葉 1 棘科 し ば こ ー た ち が や
 2 天南星科 ま や ら ぶ せ き し や う へ び の た
い は ち て ん なん し や う い は び が て ん なん し よ
う

Am
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

3 蘭科 さきさき ふうらん ひとばらん
 ひきらん あつもてさう しゆゆらん
 4 燈心草科 む
 5 百合科 をにり わすれくさ つるゆり
 あるこり やまらつたよき をもと きばし
 んとらん
 6 莎草科 かやゆりくさ かさすげ
 7 水科 みろたはばこ
 8 浮萍科 おをうきくさ
 丙苔蘚門 羊齒類 五穀科 車輪科
 ひかげかつらひはひば 走きなでんちとう
 さんしようも あかうきくさ 去たした せん
 まん せらび うらまろ こしだ しのぶひ
 どつバ のまじのぶ きよすみまだ まめつだ
 いはまつ
 蕨苔類 すぎおけ せおおけ みづおけ うら
 おけ
 菌藻類 一ひたけ はつたけ 一めま へふた
 おか はたけ きくおけ はまたけ 一よう
 ろ せくへさだた さるのこまかけ はんぬん

さけ にはたけ かうたけ さるをかせ ふく
 けらう はあおけ
 林地占領ノ多少ニヨル樹種別
 第一最多ノ樹種(1)針葉樹 モミ(2)潤葉樹
 カシ類 サカキ ヒサカキ アセヒ シキミ
 ツバキ シロダモ アカメガシ サンシヨウ
 クロモシ ガマヅミ カマツガ シヒ カヘテ
 類 サルフタキ イハヤナギ コナラ
 第二多キ樹種(1)針葉樹 ツガ アカマツ
 (2)潤葉樹 フサククラ カラスサンシヨウ
 サルトリイバラ イヌサンシヨウ トネリコ
 バリバリ ニバトコ イチゴ類 バラ類 アサ
 キ エゴ ヤブニツケイ ツリハナ ハコチウ
 ツキ ハギ クミ類 ウネモトキ クマヤナギ
 ヤマサクラ ツバシラキ ミヤマシキミ ヤ
 マモ スルデ アヲキ
 第三少キ樹種(1)針葉樹 カヤ イスカヤ
 クロマツ (2)潤葉樹 ホウカキ ユヅリハ
 クハ イボタ マユミ タラ ヤマブキ コウ
 ヅ ウコキ エハヤナギ アブラキリ クロカ

チモチ ハイノキ ヤブニツケイ イトキリ
 チンジュ 子チキ ヤマハゼ タイシントチハ
 ナ ヤマカウハジ ゲヤク モチ ヲニシバリ
 ハナイカタ シヤシヤンボ
 第四尤も少キモノ(1)針葉樹 ヒメゴマツ
 ヒノキ サハラ コキ (2)潤葉樹 テムノ
 キムク アツキナシ トベラ オニクルミ
 ヤブコウジ ハクウンボク カツラ ヤツデ
 ヤマクルミ マンリヨウ シナノキ アクドラ
 シ カクレミ
 發芽力ノ盛ナル樹類 コナラ ミツナラ ハ
 コチウツキ ウシコロシ モミチ サカキ ハ
 イノキ ミツキ ハキ
 發芽力ノナキ樹類 マツ ツカ スルデ イ
 キリ
 岩石上ニ生スル樹類 シバヤナキ キハキ ツ
 クハチウツラ 霜ニ強キ樹種 マツ ウツキ
 クロモチ ヒバ ヤナギ ダモ ヒサカキ サ
 カギツバキ ナラ モミチ ムラサキ
 霜ニ弱キ樹種 カキ クワ ハコチウツキ カ

フソ ミツキ アカメカシバ アブラキリ
 サククラ ウリノキ ケヤキ
 ◎動物
 森林直接有害動物 第一綱 哺乳動物
 第一目 偶蹄類 シカ シ
 第二目 猴類 サル(方言エテポー)
 第三目 啮齒類、ノウサギ、ヤマチヅミ、
 リス
 森林直接有益動物 第四目 食肉のい
 キツ子、イタチ、テン、サヒグマ
 第五目 食虫類 モグラ、ヤマモグラ
 第六目 蝙蝠のいカワホリ、ヤマカワホリ
 森林有害鳥のい 第二綱 鳥のい
 第一目 鶉鷄のい ヤマドリ、キジ
 第二目 鳩鶴のい キジバト、アオバト
 第三目 燕雀のい カケス、マヒワ、スズメ
 カラス、シメ
 森林有益鳥類 第四目 猛禽類 トビ、タ

カ。ハヤブサ。フクロ。ミヅク。第五目
 燕雀類 カツコウ。ミンサハエ。ホーシロ。ホ
 ト。キス。メジロ。エナガ。アオシ。五十カラ
 シジーカー。コガラ。ヒガラ。ヤマガラ。ママ
 ドリ。ルリビタキ。ツグミ。ヒヨドリ。ツバメ
 ムクドリ。セグロ。カワセミ。モヅ。ウグイス
 ヒバリ。セキレイ

森林ニ對シテ有害有益決定セサルモノ

第六目 刺木鳥類 キタキ。コケラ。マカゲ
 ラアオゲラ

森林有害虫類 第三網 両棲類

第一目 蛙類 ヒキガエル。アマガエル。ツチ
 ガエル。アカガエル。カジカカエル

第二目 蝶螺類 イモリ 第四網 虫類

マムシ。アオダイショウ。ヤマカガシ。ヤモリ
 シマヘビ。ジモグリ。トカゲ。第五網 蜘蛛
 類 テナガゲモ。ジゲモ。タナゲモ。トタゲ
 モ。ハイトリゲモ。フクロゲモ。ジョロノゲモ
 ミヅゲモ。第六網 昆虫類

第一目 鞘翅類 ミチオシエ類 ミチシルベ

ハンショウ。ヨミチシルベ。ラサムシ。ウジ
 ムシ。ヲサムシ。三種アリ。コムシ。シ
 ワムシ。三種。ヘツビリムシ。テントウ虫。コ
 キツコウテルトウムシ。アカナシテントム
 シ。ナシホシテントムシ。コアカホシラント
 一虫。シラーカモチ虫。シヨイホシ
 第二目 膜翅類 ヒメハチ。イセハチ。ハチ
 ニハチ類 馬尾蜂類 コシホフ蜂類 アナハチ
 類 ハチ。アシナガハチ。ヤマハチ。アカマル蜂
 アルクマ蜂。アカアリ。クロアリ。オーアリ
 シマアリ。第三目 板 翅類 トノサマトン
 ホ。オイトンホ。アカトンホ。ムキカラトンホ
 シオカラトンホ。ヲオサイトンホ。ヤンマ。ム
 ラサキトンホ。第四目 翅類 カゲロー
 ナワメカゲロー。クサカゲロー。クロシリアケ
 ムシ。シリアケムシ。ラクタムシ。第五目
 有るいカメ虫。サシカメ。セミ。第六
 六目 直翅類。カマキリ。オーカマキリ
 第七網 多足類。ムカデ
 森林有害虫類 第一網 葉樹ニ對シテ

ウオトツチハンショウ。カミキリ虫。コガネム
 シ。カナブン。カフトムシ。タマムシ。ク
 ワガタムシ。コメツキムシ。キクスイ。第二目
 鱗翅類 ヒオトシ。シロテウ。シミテウ
 カラスバアゲハ。アゲハ。キアゲハ。フアゲハ
 タイマ。イアゲハ。ムヤホーアゲハ。アオコシ
 アゲハ。キテウ。ヤマシロテウ。オナガアゲハ
 クモカタヒワモンテウ。ウラギンコシロテウ。
 コシヤノメテウ。キマタラテウ。タイミョーセ
 ツ。イケモンシ。モンカラテウ。ウマクロテウ
 タスキノアカコシケムシ。ミノムシ。ヤマハ
 イノテウ。テクマノテウ 第二針葉樹ニ對シテ
 第一目 鞘翅類 カミキリムシ。スキカミキリ
 スキノアカミキリ。コカチムシ。カナクシ。
 クワカナムシ。トラフムシ。コキムシ。オーコ
 キムシ。マツノヲムシ。チヨキリムシ。オトシ
 クシ
 第二目 鱗翅類 マツケ虫。スキケ虫。スツノ
 スイ虫。マツノイモムシテウ。ミノ虫。カイカ
 ラ虫。モシケムシ。ケツホームシ。セシドシア

マツスワムシ。第三目 双翅類 ハイ。フコ
 カ。第三 苗圃ニ對シテ有害動物 ムクラ
 鼠類。鳥類。雀。虫類。チキリムシ。オケラ
 其他森林内ニ生植スル動物
 甲殻類 カニ。ヌマエビ。蜘蛛類 タニ。多足
 類 ヤステ。ゲジ。直翅類 イナコ。コウ
 ロキ。キリキリス。アナンホ。螺虫類 ヒル
 ヤマヒル。ミハス。腹足類 ナメクシ。カタツ
 ムリ。魚類 ウナギ。トジョー。ハセ。フナ
 ハヤ。養魚類 マコイ。ヒコイ。マス
 (雜 報)
 ◎證書授與式
 去る三月廿六日第一回卒業證書授與式を行はせ
 らる來賓の主なるものは郡長郡參事會員郵便
 局長町村長小學校長及び生徒父兄全保證人等に
 して松田校長舉式の旨を告げ大城教頭は學事の
 報告をなし校長より卒業並お修業證書授與あり
 て優等者並に精勤者に賞品の授與あり後松田校
 長は卒業生修業生に對して一場の訓辭を與へら

れ部長參事會員の祝辭演説ありて卒業生の答辭
修業生の送辭ありて目出度式を終へたり 卒業
生は別項記載の如にも今受験者の内合格不合格
者數及受賞者の姓名を擧ぐれば次の如ま

第一學年 第二學年 第三學年

受験者數

合格者數

不合格者數

第一學年優等受賞者

今卒業生並に修業生總代の祝辭を左に掲げん

送 辭

吾人カ最も親愛ニシテ兄弟セル卒業諸氏茲ニ三
ヶ年ノ久シキ恰モ一日ノ如ク本校ニ在リテ奮勵
セラレ今ヤ春色蒔蕩彼ノ枯色ヲ呈セル萬木モ其
眼ノ中ヨリ起ツラ黄昌ヲ迎ヘントスルノ好時機
ニ際シ學成リ業遂ケ將ニ此ノ校ヲ去リ或ハ官界
ニ或ハ教育界ニ或ハ實業界ニ各其手腕ヲ奮ハレ

答 辭

ントスルニ際シ生等悲喜交々至ル其悲ムヤ良友
ヲ失フカ爲メナリ諒ニ曰ク去ル者ハ日ニ疎ク逢
フモノハ日々親シト然ル時ハ日ニ親シキ情ヲ忌
レテ日ニ疎キノ悲ニ感シ再ヒ一堂ニ會シテ萬情
ヲ述ヘント欲スルモ豈容易ナランヤ是予等カ最
モ憾トスル所ナリ其喜ヒヤ諸氏カ多年螢雪ノ功
ヲ積ンテ畜積セラレタル學識ヲ以テ各方面ニ雄
飛セラレ小ハ以テ一身ノ榮譽ヲ計リ大ハ以テ國
家ノ爲メ愈其光華ヲ放タシメラレ予輩後進ヲシ
テ益奮勵ノ念ヲ發セシメラレン事ヲ期スレハナ
リ是ヲ以テ之レヲ見レハ今日ノ別區々ノ情豈敢
テ悲ムニ足ランヤ冀クハ 諸氏自重自愛以テ其
本務ヲ全フセラレンコトヲ茲ニ諒別ニ臨ミ聊カ
無辭ヲ呈シ以テ送ル

明治三十七年三月廿日
修業生總代・西尾忠治

ノ爲メニ修業證書授與ノ奠ヲ舉行セテレ利ヘ來
賓諸彦ノ來臨ヲ辱フス生等ノ幸榮何モノカ之レ
ニ加ヘン是レ偏ニ校長閣下教官各位ノ懇篤ナル
教導ト熱心ナル薰陶トニ依ラスンハアル可ラス
生等何ヲ以テ之レニ酬ヒンヤ願ルニ森林ノ事業
ハ致富ノ淵源ニシテ之レカ盛衰ハ國家ノ消長ニ
影響スル固ヨリ大ナリ吾カ國維新以來到ル處森
林荒廢ノ慘狀ヲ呈シ國家ノ前途大ニ憂フヘキモ
ノアリ生等幸ニ本校ニ在リ之レカ經營ノ榮ヲ學
ヒ此ノ重大ナル責任ヲ完フセンコトヲ期ス庶幾
上望上獎學ノ至意ヲ奉体シ下校長閣下教誨ヲ守
リ夙夜勉勵此ノ責任ニ耐ヘ以テ本校ノ榮譽ヲ顯
揚スルニ勉メンコトヲ謹テ答辭トナス

明治三十七年三月廿日
修業生總代 武久貞一

◎卒業生の送別會

三月 日新卒業生の爲め講堂に於いて送別
會を開久集るもの本日の主賓たる卒業生諸君
は勿論本校職員及び學友無慮二百名各真情を

吐露去て卒業生乃前途に曠式は在學生諸君に戒
むる所ある等と氣靈々たるの裡快談放論するこ
ど午後零時十分より同四時に至り各名殘を留
めて閉會しぬ

◎新卒業生諸君

今や新卒業生諸君は多年螢雪の苦を積まれ功正
に成りて各將に活社會に出で、研磨蓄積せられ
たる學識と經驗によつて畢生の手腕を振はんと
せ快なるゝな諸君行け行け山野は到る處郷等が
拓殖を待ちつゝあり然れども礎礫不毛の上經營
懺悔を極むるもの又多あるへし郷等願うは新進
の銳氣を沮喪せしむること勿れ次に卒業生諸君
の族籍氏名を掲ぐ

- 長野縣西筑摩郡福嶋町 遠藤宗作
- 全 更級郡八幡村 齊藤正雄
- 全 西筑摩郡福島町 岡戸廣治
- 全 大桑村 高樋博
- 全 福島町 宮下作次
- 石川縣羽咋郡熊野村 小瀧升太郎
- 長野縣南安曇郡梓村 輪湖正由

全 西筑摩郡木祖村 永瀬 豊治
 全 南安曇郡有明村 三澤 義治
 全 西筑摩郡田立村 林 哲治
 鳥取縣日野郡 山上村 坪倉 藤三郎
 長野縣西筑摩郡福島町 森 正治
 全 縣全 郡 全町 近藤 晶平
 全 縣全 郡山口村 園原 咲也
 全 開田村 中村 茂
 全 三岳村 原 四郎
 全 木祖村 寺島 恒治
 全 福島町 大森 久治
 石川縣羽咋郡北畠知村 福田 友治郎
 長野縣西筑摩郡福島町 伊東 兵太
 全 讀書村 福井 利吉
 全 大桑村 古根 是
 全 福島町 兒野 榮
 全 全町 原 庄次郎
 鳥取縣日野郡 山上村 青戸 爲九郎
 長野縣西筑摩郡日義村 征矢 野克己
 全 東筑摩郡廣丘村 小松 精内

全 西筑摩郡讀書村 松原 三郎
 本年三月當校を卒業せられたる諸君は各地に需
 要に應えて夫々左の通り任地に赴た何れも熱心
 業務に従事せられたりあり
 鹿兒島大林區署 雇 征矢野克己
 東京府林業事務所書記兼森林監守 遠藤 宗作
 京都府相樂郡立農學校 教諭 齊藤 正雄
 山梨縣 林業手 岡戸 廣治
 農科大學林學部 雇 高橋 博
 長野大林區署飯山小林區署 雇 宮下 作治
 東京大林區署 雇 小瀧 升太郎
 長野小林區署 雇 永瀬 豊治
 長野大林區署 森林主事 三澤 義治
 廣島大林區署 雇 森 正治
 山梨縣 林業手 近藤 昌平
 鹿兒島縣熊毛郡立農林學校教諭 園原 咲也
 鳥取縣日野郡林業巡回教師 青戸 爲九郎
 静岡縣富士郡林業講習所講師兼舍監中村 茂
 山梨縣廳 林業手 原 四郎
 東京大林區署 雇 寺島 恒治

御料局木曾支廳王瀧出張所 雇 大森 久治
 長野大林區署岩村田小林區署

鹿兒島大林區署 雇 伊藤 兵太
 鹿兒島大林區署 雇 古根 是
 長野大林區署上田小林區署 雇 兒野 榮
 鹿兒島大林區署 森林主事 坪倉 藤三郎
 任地未定 福田 友治郎
 縣設西筑摩苗圃ノ事業ニ從事中 原 庄次郎
 ◎林哲次君の卒業後家庭に於て専ら自家所有の
 山林經營に従事せられたりあり
 ◎輪湖正由君と盛岡高等農林學校へ入學し志望
 を以て目下東京本郷湯島天神町二ノ十武居三
 郎方に止宿し正則豫備校及び正則英語學校に
 入り勉學中あり
 ◎福井利吉君は家庭の事情により遠く他へ出ま
 る能はざる爲め目下西筑摩郡三留野小學校に
 奉職中なり
 ◎松原三郎君の病氣の爲め目下郷里に靜養中な
 り

◎職員任命

助教諭兼舍監 林 重郎
 助教諭に任せられ兼職如故
 教授囑託 征 矢野 茂樹
 助教諭兼書記に任せらる

今井 碧海
 今回召集に應えて校醫囑託を解かる
 芦澤 三郎

今井碧海氏乃後任として今回當校醫を囑託せらる
 ◎入學式

四月四日講堂に於て新入學生五拾六名は入學を
 許され入學式を擧げられて校長の訓辭あり后寄
 宿舍へ入舎するものに對しては入舎生諸君が變
 々たる家庭生活あり一轉じて茲に新生活に向つ
 て開展するに當つては寄宿舎生活に最も必要
 なる自己の責任を竭すこと及公徳を重んずるに
 意ななくては共同生活の侶伍し一致團結して
 校紀の美は求むべからざる旨舍監の諭告ありて
 閉式す

◎開校三週年紀念祝賀運動會

明治三十七年五月十五日是の日は吾人校友の尤も紀念すべき吉辰なり曰はく何ぞも然るか抑も當校の誕生日より由つて例にとりて紀念運動會は催されぬ運動會役員并に校友各員の盡力空しからず去て會場は先づ次の如く裝飾されぬ場の入口には高さ丈餘の綠門を作り紀念會と大書せる扁額を掲げ交又せる國旗は其間に懸へり場内に高く翻々たるは各國々旗の繩張りに纏ふのなり午前七時集合の喇叭吹奏されぬ爰に於て隊伍整々校門を出で金刀比羅山を以て哈爾濱に擬し哈爾濱占領の目的を以て進軍去一齋射撃の後突撃を以て全々此の地を占領し日章旗を押し樹て凱歌を奏して歸校す時に八時半校友會員の意氣壯にして勇氣萬軍を厭するの風あり忽ちにして號砲一發競技は始まりぬ會員の組織よりなりたる樂隊は場の一角に位置して會員の元氣を鼓舞し競技漸々進むに従つて興奮

加はり參觀人は次第に増加來たりて頗る難杏を極め無慮千有餘名の參觀人ありたり運動の種類は左記の如くにして内に謎藏滑稽のものあり勇壯活潑のありて偶々參觀人の腮を解かしむるあり又ハ切齒扼腕せしむるもれありて校友相互の感情を興奮せしめたるは言ふに及ばず會衆は歡聲を迎へたるも又快なりき午後五時競技全く終を告げ兩陛下の萬歳を唱へ木曾山林學校の萬歳を唱へて閉會を告げたり日本來賓の主なるものは本會名譽會員特別會員なりた今其運動の種類及受賞者を擧ぐれば次の如し
一等賞 二等賞 三等賞

◎通信

在靜岡縣富士農林學校中村茂君の書信
農林學校は大宮町の南端に有之申候大宮町と鈴川驛とは四里に近れ里程おて鉄道馬車の設け有之候間交通上には至極便利に有之候。

小生の從事すべき業務の同校内に設けてある林業講習所の林科専任に有之申候此講習は一ヶ年を以て終る規定にて所長は有名なる林業家金原明善氏に有之候卒業生退學すれば更に生徒を募集して教授致す組織に有之申候現今講習所ハ生徒は三十三名(定員四十名)有之其年齢ハ最少の者十九歳二名にして最長年齢は三十六歳の者有之候尤も多數は二十五六歳の者有之候教室は農林學校内に有之候農林學校乃方は生徒も年少に有之候得共講習科ハ左記の通りにて一寸閉口致し候。
通學不便の生徒何れに寄宿舎ハ衣食致し居り候寄宿舎の様子は山林學校に異なる事これなく候講習科の寄宿生は拾五名有之小生の其含蓋を

命せらる近き過去の自己を追想し含蓋抵抗組の首領たりり自分が今や含蓋たらんとは思ひ半ばに過ぎ只夢の如き感に堪へん候。
講習科は九月一日に始はり翌年八月三十一日に終り申候其學科課程は左記の如く有之候

| | | |
|------------|--------|--------|
| 前 | 後 | 全 |
| 修身 | 動物學の大意 | 動物學の大意 |
| 植物學の大意 | 上 | 上 |
| 物理及化學の大意 | 二 | 三 |
| 造林及び保護學 | 一〇 | 一 |
| 森林利用及測樹 | 七 | 二 |
| 森林測量學 | 七 | 三 |
| 森林經理 | 七 | 一 |
| 森林經理 | 七 | 一 |
| 林業に關する法規大要 | 一 | 一 |
| 期 | 時數 | 時數 |

全 上 八
全 上 四
全 上 五
全 上 一

右の外測量と造林の實習有之規定に候。

小生の受特科目は利用測樹學測量經理に有之候
茲に小生は大に生徒時代の筆記受賣りの決心致
し候乍併誠に閉口致し候。

其他は農林學校に教師を分任致し居り候。

農林學校は校長以下八名の職員が居り申候。

富士製紙會社は第一第二の二工場に分るれ居り

何れも當校より東南に位し第一工場迄約半里第

二工場へは約十町斗りに有之候實に大仕掛のも

のに候何れ是等の事は後便に可申上候 草々

三月二十九日 午后十時

芙蓉峰を目前眺めて 中村 茂

上田小林區署三澤義治君よりの書信

前略六月一日長野大林區署より上田小林區署に
着任致し愈々實地に仕事に従事致す様相成候先
づ仕事として苗圃事業林産物公特賣に關する
處分一般の保護司法警察官職務等にて造林地實
地測量等は常に致し居り候先は右無事着任の報
知迄申上候 頓首

在種子島園原咲也氏よりの信書

前略十三日午後五時神戸着十六日の午前三時頃
鹿兒島に着致し候筋かに憂ひし船酔ひも幸ひに
して恙なかりし事は誠に仕合せに候海中風あり
雨降りてあつたらの景色も見得ざりしが砲臺燈
臺に備ては巖上の松沖の小島碎けては散り散り
ては結ぶ玉の白波面白く見へ申候鹿兒島にて便
船を待つ事五日に及び其間雨降りて大に困却致
し候 (中略) 二十日午後九時鹿兒島發翌二十

る好適の地にこれあり候 頓首

四月二十九日 園原咲也 拜

齊藤正雄氏よりの通信

前畧當校は低度の學校として意外に完備致し
居り校舍一寄宿舎一畜舎一納屋一養蠶室一其他
炊事場食堂等附屬致し居り實習地は合せて二町
餘坪にて尙現今擴張致し居り候本校職員は校長
以下五人にて蠶業學校卒業生一獸醫學校卒業生
一助教諭兼書記一小学生にて有之候。

生徒數ハ一學年四十人二學年二十一人三學年十
五人有之愚生の受特は森林學凡べて算術氣候植
物生理外國地理等にして短才の私故驚馬に重荷
と言ふ有様にて誠に閉口致し居り只受賣的に教
授致すより外活路おれなく候間在學中の筆記を
顧問と致し日々出勤致し居り候 (後略)

五月二十三日 齊藤正雄

一日午前六時種子島に到着致し候種子島は一番
北の北種子村と言ふ處にて郡役所所在地にて
丁度福島に海を繞りし様な處にて人口七百餘
言語風俗鹿兒島とは又大お異なる様に有之候併
し決して小生自身を不自由を感ずると言ふ程の
事とこれなく候郡役所校舍等何れも福島にある
夫れの如く完全の物おはこれなく候て誠に御話
しになつたもればはこれなく候私立種子島中學
校の古物を引受けたることにて生徒の譲り受
けたるものも四十名餘在學致し居り候未だ何一
の設備をなく御話し申上げる事もおれなく候
得共何れ不日調査の上御報知仕る可く候學校は
二十六日入學式おあり二十七日より授業今日
より十一日目に候得共此頓狂先生威厳もなく品
位もな久全然生徒とぶさけて遊ぶ様な心地が致
去地理礦物算術など言ふ腦中に皆無の學科擔任
と相成り候て随分妙な者にこれあり候併して二
日間を數へされぬ失敗を致し候右の外造林植物
の二科を受持候(後略)土地の人間は至極人氣
宜しく野卑で正直に候馬鹿正直的頓狂は頗る

遠藤宗作氏よりの通信

前略道中無事常事務所へ到着致し候直ちお辞令を受領し本日より着任致す事と相成候常事務所には菊池所長の外枝手一名(農科大學乙科出身(監守二名)雇壹名にて何れも目下は出張中に御座候故に事務所には所長と小生との二名のみ罷り在り候得共何れ近日中には所長は小生を連せ出張致すこれ由に御座候本年は百町歩を造林すべし見込にて日々頗る多くの入夫を使用し居り候間事務頗る多忙にて實地の研究の充分出來得るならんと心に打喜び居り候。又事務所に於ける業務沿革お伺きて、所長より承はり御報知申上ぐべき心組に御座候(後略)

四月三日

遠藤宗作

き炎威を冒して頗る健在に馬匹の訓練に勤務中左の通信ありたり。

時下向署の折柄諸君益御壯健に被爲渡御勉強遊ばされ候由遠隔の地にありながら欣喜之至りに御座候降て小生動員下命と相成り入隊以來御陰を以て無事日々征露軍後方勤務に多忙を極め居り候間乍他事御安心被下度候却説回顧すれば去る三月下旬袂を分ちり以來諸君の中より偶々御通信に接し運動會等の状況概略承知致し候小生は入隊以來已に學び得たる諸種の公式等は皆何れへか去り只征露軍征露軍として日々刻々殺人の下稽古の及致し居り候思へば殘酷の如き次第なきをも人道に悖り東洋の平和を益々危殆に迫らしめ而も平然たる如き彼れ露西亞を降懲する爲め日々の勤務に有之候事故なんどなく平時より層一層張合を込め申候實に戦時乃勤務は平時に於るて想像し及ばざる程に有之申候小生は御承知の通り第二軍野戦部隊の最後部隊たる補充馬廠勤務の事なれば援軍の偉功を樹つる事も出來

す從て生命を預丸の的となす譯にもこれ多々金色燦爛目を奪ふの金鶏章拜受の望もこれなく思ふ半ばに切齒扼腕之至りに御座候毎日毎日猛獸の如く荒れたる徵發馬匹之訓練に汲々致し居り候少しく乗り得る様に出來かけし馬は直様野戦部隊へ輸送致し荒れ馬とて乖御致しわり敵前の勤務とり遙かに困難にこれあり申候又徵發入隊する馬匹も日々二拾頭乃至貳拾五六頭宛に有之候尤も十六日とり昨日迄入隊之徵發馬匹は東京市中の馬匹殊に華族方の馬車馬なれば柔順にして實に見事な馬匹に有之候今假りに其持主及び價格を擧ぐれば實に左の如し

徳川候 (元尾洲候) 五頭實價千五百圓ヨリ

八百圓以上

徵發價格貳百五拾圓

徳川候 (元紀洲公) 五頭實價全上徵發價格

三百圓

淺野伯 貳頭實價貳千圓ノモノ

徵發價格參百圓

酒井伯 參頭全上

岩崎男 四頭全上

尤も右は献納すべき筈乃處徵發令お基き徵發せざるものなれば不相當ながらも支拂ひの由而して其金額は皆軍資金に献納する由何れ是等委細の御話ば復員歸郷の上御話し可申候。

第一軍の戦況及行動は毎日新聞にて知るれども第二軍の行動は毎日毎時電報有之實に勇ましく候尤も隊外に漏らす事能くす候種々申上度事のみこれあり候得共萬感百出一を盡す能く寸幸に御賢察被下度候。

兵營目下の懷舊

思ひ出づる事もあは身の月見れば

などて昔の戀まかるらん

いかにかく昔戀しと思ふらん
御國の爲めに剣とる身

營所の夢に

何事も見はてぬ世ぞと知りつゝも
はかなき夢をなほかこつかな

營所にて西比利亞を夢む

まだしらぬまど國までも海原を
わたして見するゆめのうき橋

はるびんの城の砦も見つるかな
空れたものは夢路なりけり

右は營所の徒然に讀み綴りし調べに候は、御笑
覽下されたく候

五月二十日

征露第二軍最後部隊に於て中村しげる

◎校友會員諸君

本校々醫今井碧海氏は召集に應えて目下在京中
なり氏より校友會及當校職員への通信左の如く
炎暑の候各位益々御清程奉大賀候

出發の節は種々御厚情に預り奉鳴謝候以來大に
御無沙汰何れも申譯無之候段平に御海容被下度
候

東京豫備附を命せられ當分乃中垢塵深き東都に
在住の身滿洲の天地又浦漣の光景は夢にも見る
事の出来ぬ身實に衷れの極御推量可被下候
出づれば電鉄あり馬車あり其外何れも彼もあり實
に閉口頓首の次第もあり。

當本院は外科重症患者のみを収容いたし其の入
院者數は日々増加致し現時小生の擔當數傷病
者百餘名加ふるに陸軍的規定の下に事務を執
る次第にて例へば恩給診斷書やら兵役免除やら
實に目の回るとは此れ事に有之候朝は七時と

當直の夜電燈の下にて

今井碧海拜

◎習志野

OLA生

も後は七時迄時々夜間勤務あり當直あり實に可
暇もなく多きは金洲南山の負傷者にこれあり常
陸丸の負傷も小生は室に入院中實に氣の毒な目
も當てられぬ名譽の傷者あり或は介者に或は杖
に依て之を實見せるものは胸中の感極なし暗
涙滂沱たらざるものなま院を見舞ふは最愛の妻
親愛兩親他愛もなき子供涙に笑に樹下に談笑す
別天地の有様にされあり候。

當時戸山に澁谷お分院を設け盛んに準備中にお
れ有り候來る旅順陥落は吾人の腕も積かぬ程の
多忙を極むる事と今と準備怠りなく候
豫備病院は雇人總數八百名以上驚きべきの騒な
り。
亦十字救護班召集勤務中
小生等の一行も皆健全勤務中
信州の健兒も多數入院せり
日々軍隊の新橋を登する限りなく候
先と右申上度後便には珍報奇談御報知申上へく
候

七月十九日

自分が豫て静岡縣富士農林學校在職中幸に富
士製紙會社の所在地であつたから全會社に
就き細大漏れなく木纖維乃分解順序や會社の組
織を調査して會報面を汚さんと思ひ居りしに突
然大命に接して軍旅に従ふこととなりままたか
ら最初乃計劃も水泡に歸ま實に遺憾の至りであ
ります今や軍陣の徒然に習志野原に於て目に
觸れしを諸君に御紹介致さうと思ひはす尤
も此習志野近傍の事情は先年明治二十九年に御
領の三里塚牧場に就て詳しく調査した事があり
ます其記録は郷里に箒中にありますから只今
は詳細には申上兼ねますから何れ後日に申上げ

るとして只今の習志野にゆき申上げます
 抑も習志野原の幅員の東西二里南北三里に亘り
 誠に廣々たる原野であります地形は殆んど平坦
 と稱して可ありでありは予習志野原は陸軍省の
 管轄に属して狩獵は宮内省の之れを禁えて居り
 ます土質は火山灰にして黒褐色を呈し所謂「ク
 ロポコ」でありまして至極輕鬆で且つ瘠地であ
 りまして之れに生えて居るは三四寸丈の芝草
 ト四五寸ノ熊笹カ密生シテ其間ニカヤカ点生シ
 テ居りますところでありはすから陸軍の建築物即
 ち假兵舎や種々の軍練に必要な假小屋ヲ譯山健
 てありまして一番營二番營と云ふ様に五番營迄
 あてまして四秀代る第一と近衛どの人殺連
 中が月に泣き雪お泣きて銀線してゐます殊小軍
 陣に於ては水が必要でありますから何れの營に
 も井を四ツ五ツ位づ、穿ちてあるが極く淺きも
 のが二十米突深きものは此の倍あります井水中
 には亞硝酸を少量に含有してをりますすから飯用
 には適しませんが夫れ故に飯用に供するには
 皆一々煮て用いてをりますす前に平坦一望を申し

またたが平坦ではあるの一畝千里ではありませ
 ん何となれば点々植林を致してありまして所謂塊
 状植林してあります尤も林業上の塊状植林でな
 いから従て不規則てあります只此植林の目的は
 林業で云ふ衛生上より來る保安林で軍隊をして
 庇蔭の地得せしむると又演習上陰掩地物の要に
 供するのでありはす樹種は黒松病柏及び杉の三
 種で其内黒松の大部を占め扁柏杉は相半ばして
 をる最も杉と扁柏は大木は有りはせん大なる
 ものも二十年生位であります黒松も別て大木
 と云ふでないが目通り直径尺二寸位のものが
 尤も太花ものでありまして何れも人工植で各々單
 純に塊植地が多處々に扁柏と杉乃混合植があ
 りはす植樹後八九年のものは随分窒植してある
 塊状の状態は不規則でも一塊地の植樹は法正に
 植格してある多くは四尺の正方形植であります
 生成の状態は三樹種共先づ佳良と思ひます併
 杉扁柏の混合植地にて十五年生の林にして充
 分閉鎖して居る林中にも芝草は依然繁茂してを
 る況んや黒松材に於ては塊状は有様も目的が

目的でありはすかゝ大小不同で中おは一反歩位
 のものもあり百本位も有り廣き地積と雖ども三
 反歩位が最も大面積であります最も原の中部は
 殆んど無立地で植樹地は四圍に多くあります東
 京以南房總乃半島は夏季濃霧強き處で現今ハ咫
 尺を辨せざる濃霧が午前九時頃迄霑れさせん尤
 も今は入梅は時節でありあるが毎日曇天で習志野
 の氣候は日中即ち午后二時頃が華氏で八十五六
 度夜の十時頃は七十度位に下りはす雨の日冷し
 いと思ふ日は七十五度位ですとたゞて、ち、ち、ち
 ちとたゞ、ちれや氣を付けの喇叭がなりました
 之れから乗馬集合で演習になつたから筆を止む

S N 生

校友會御中



本會彙報

◎會員動靜

本會々員として新九に入會せられし諸君は左
 如し

特別會員

助教諭

征矢野茂樹
 征矢野源吾

通常會員

亦羽博一
 中畑三郎
 太田喜代松
 倉田仲治
 川崎本雄
 中島昌利
 三澤標治
 水野忠一

亦岩藤太郎
皆戸謹一
永田精一郎
北濱長三
宮崎二郎
矢嶋駒治
寺澤藤二郎
和田宗吉
木村晋次郎
有賀昇
竹内茂
廣瀬静之進
肥後金四郎
武居文作
松原重郎
小澤順
西野入徳
肥田幸一郎
宮崎源一郎
寺島俊一

退會者

澤田貞次郎
由尾忠助
新井喜多雄
林兼吉
原久三郎
小林恭一
上條嘉一郎
山本鉄夫
市川潔
荻村彌太郎
湯川久雄
柄澤傳治
青木正秋
百瀬親人
三崎真一

◎本會特別會員にして西筑摩郡書記たりし佐藤正太君は本職を辭して福嶋郵便電信局長となりたり同上細尾文雄君は其後三瀧郵便局長に就任せらるしが急病の爲め遂に白雲玉樓中

の客とならる本會の爲め痛惜の至りなり

◎木曾山林學校々友會費
第二回會計報告

(第一回會計報告ヨリ明治三十六年十二月三十一日迄)

經常部

収 入
一金百六拾壹圓
一金拾參圓貳拾貳錢
一金拾壹圓七拾壹錢五厘
計金百八拾五圓九拾參錢五厘

會費收入
雜收入
前回ヨリ繰越金

支 出
一金拾貳圓
一金九拾四圓四錢
一金五圓五拾四錢
一金壹圓八拾九錢

補助費
會報印刷費
消耗品費
通信運搬費

臨時部

一金五圓六拾錢
一金貳拾圓六錢
一金貳拾貳圓拾錢貳厘
計金百六拾壹圓貳拾參錢貳厘
差引殘金貳拾四圓七拾錢參厘

器具器械費
新聞雜誌及書籍購入費
臨時部へ繰入金
寄附金收入
經常部ヨリ繰入

收 入
一金參拾四圓五拾錢
一金貳拾貳圓拾錢貳厘
計金五拾六圓六拾錢貳厘

支 出
一金五拾六圓六拾錢貳厘
計金五拾六圓六拾錢貳厘
差引殘金ナシ

第二回開校紀念運動會費

右之通り相違無之候也
明治三十七年八月 日

幹事長

明治三十八年七月廿八日印刷

全年九月一日發行

〔非賣品〕

長野縣西筑摩郡福島町

編輯兼發行人 神 村 律

長野縣埴科郡屋代町二百七十五番地

印刷人 北川 健之助

長野縣西筑摩郡福島町

發行所 諸式用達商會

長野縣埴科郡屋代町

印刷所 埴科活版所

